

われわれの教育活動

2005年度総括と2006年度方針

27

2006年4月

一橋大学スポーツ科学研究室

われわれの教育活動

2005年度総括と2006年度方針

27

目次

はじめに	3
・われわれの教育活動をめぐる状況	4
1 . 大学をめぐる政策動向	4
2 . 本学の動向と運動文化科	5
・2005年度の教育活動の成果と課題	7
1 .カリキュラム編成と体制	7
2 . 2005年度の教育活動の成果と課題	9
(1) スポーツ方法	9
(2) スポーツ方法	14
(3) スポーツ科学・健康科学	19
(4) 教養ゼミ	23
(5) 学部講義・ゼミ	25
(6) 大学院講義・ゼミ	28
3 . 教育条件の整備・拡充	30
・教育部活動	32
1 . 実践交流会	32
(1) スポーツ方法 における「シラバス」の実施報告及び検討	32
(2) 私のささやかな授業：本学実技科目 30 年の取り組み	34
(3) スポーツ科学・健康科学科目の検討に向けて	36
2 . 教育活動日誌	39
3 . 調査活動	39
4 . 教育部の活動・体制	43
・2006年度教育活動の方針	44
1 . 2005年度の達成と課題	44
2 . 2006年度の基本方針	44

3 . 教育活動	46
(1) 2 0 0 6 年度のカリキュラム編成と体制	46
(2) カリキュラムおよび教育内容・方法の充実	47
4 . 教育条件の整備・拡充	48
5 . 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整会議	49
6 . カリキュラム開発、教育方法改善のための調査・研究	49
7 . 教育部の活動	49
(1) 諸行事の開催	49
(2) 調査活動	50
(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行	50
(4) 2 0 0 6 年度教育部関係日程（案）	50

年間計画

- 資料 1 . 2 0 0 5 年度時間割
- 2 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査用紙
- 3 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査結果

はじめに

もう再び年度の終わりと新年度の時期が来た。何とも忙しかったというのが個人的な実感である。教育とその環境を巡る動きが急で、その対応に追われたという実感が強い。

思えば、1990年の大学設置基準大綱化による体育の一部選択化、1996年以降の学部へのインテグレーションによる専門科目の開講、2000年の大学院部局化に伴って、われわれは旧教養科目、学部科目、大学院科目のすべてを担当することになった。確かに担当コマ数は増えたが、一方で専門科目担当の充実感もある。

しかしここに来て、再び旧教養科目の縮小の動向が見え隠れする。

国立大学法人として本学は今後5年間に19億円の赤字解消のために、退職者の後任採用は1年を待たねばならず、さらに来年度の非常勤講師の30%削減、そして再来年の50%削減と、教育体系さえ危機に陥る状況である。その上に、来年度から先5年間で公務員定員の5%削減が閣議決定された。これが新自由主義の下での構造改革の実質である。

こうした中でも、大学教育研究開発センターを中心に、授業改善の試みも進行している。授業評価も、肝心の学生自身の学習態度を問う視点も加えられ、少しずつ教育評価の体裁が確立しつつある。

授業評価は、本来は学生の学力形成の、そしてそのための授業改善の1つの手段である。我々運動文化科はこうした作業をすでに四半世紀前から行ってきており、それを授業改善に生かしてきた。この冊子はその証拠である。それ故に、運動文化科への学生の評価の高さの原因はそこにあると自負している。

さて、運動文化の実技（スポーツ方法）での学生の感想の中に、「友達が出来た」というものが増えている。この間の学生の育ち方を反映して、彼らの人間関係は薄っぺらなものになりつつある。それだけに人間関係に悩んでいる。そうした中で、授業の場で人間関係を結べる教科として運動文化や少人数のゼミへの期待は益々大きくなっている。

教育とは科学・文化の知識の習得と同時に、その過程で人間関係を形成することである。この両者が有機的に結合したとき、そこに「良い授業」が成立する。この教育の基本を忘れた多人数授業での授業評価など、前提が問われなければならない時代である。

ともあれ、関係者の今年度の努力に感謝しつつ、教育条件としていっそう厳しさの増す来年度も、それに負けずに更なる努力をしたいと思う。

2006年3月 内海 和雄

．われわれの教育活動をめぐる状況

1．大学をめぐる政策動向

2004年4月からはじまった国立大学法人は、大学もいっそうのグローバルな競争に駆り立てられることを明らかにした。競争的資金の分配は、「21世紀COEプログラム」や「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」などの採択にみられる。運営費交付金の額が一定であり、さらに効率化係数により年1%づつ抑制されていくなかでは、外部資金の獲得は欠かせないものである。しかしながら、教育系や社会科学系のような、外部資金の獲得が比較的困難な大学においては、いきおい経費の削減は人件費の抑制へと結びつくが、「人材」が自己資金であるそのような大学において、不十分な構成員の体制は、教育・研究という大学の根本を揺るがしつつあるのである。法人化が目指していた各大学の自由な活動という目標は、2年目になり、ますますその虚像を明らかにしているといっていよう。

国立大学法人が、あくまでも不自由な存在であることは、2005年8月に示された2年ぶりの月例給の引き下げ(俸給月額の引き下げ及び配偶者にかかる扶養手当の引き下げ)を示す人事院勧告に示されている。各国立大学法人においては、人勧に「準拠する」かたちで、月例給の引き下げと期末手当の引き上げ(0.05月分)が示された。法人化後に可能になった労働組合による賃金交渉により、各大学によって対応は異なっているが、実質的に「人勧準拠」の方針は貫かれているといえる。

また、2006年4月には給与体系の抜本的な改定を目指し、導入が予定されている査定制度については、未だその全容は示されていない。先の人勧は「地域手当」を新設することで、地域によっては給与が上昇するようにもいわれているが、実際には基本給が下がることにより、生涯所得への影響は、世代が若くなればなるほど深刻なものとなっている。そのようななかで安定した、優秀な人材の確保はますます困難にならざるをえないだろう。また、地域給による引き上げ分を含めた財源は運営費交付金の増額が見込まれない以上、各大学の自助努力にかかっており、都市部の諸大学においてはさらなる負担増となることもありうる。しかし、それを補う自主財源の確保については、各大学の性質により限界もあり、事情の似た大学や近隣大学との連携を深める動きも見えている。

さらに、2005年12月に閣議決定された「行政改革の重要方針」(12月24日)の、国家公務員5%純減を打ち出したことは、さらなる難問を突きつけるものである。これに基づき、「その他の公的部門」として、国立大学法人に対しては5年間で5%以上の人件費削減が盛り込まれたのである。これとは別に、主たる財源である運営交付金には1%の効率化係数がかけられているが、これは標準教員定数にかけられているものでない。すなわち、前述の5%の削減はそれ以外の人件費によってまかなうということであり、新たな教職員の採用の抑制あるいは削減、賃金カットという事態が考えられうるのである。

COEや特色GPの獲得のためには、優秀な人材の確保と能力を発揮できる環境が必須であるが、経費や人件費の削減が、そのような人材の確保を抑制し、研究・教育の環境の悪化を招くという悪循環を生じさせつつある状況がみられる。新自由主義的競争の国立大学への導入が、研究や教育の活性化を促すと標榜されてきた独立法人大学化であったが、その結果は2年目に

して、文科省や人事院勧告による縛りがますます強まっており、独立法人大学を巡る状況はいっそう厳しくなっているといわざるをえない。

また、大学教員組織の改変についての議論も進行中である。中央教育審議会（鳥居泰彦会長）の大学の教員組織の在り方に関する検討委員会では、2005年1月の答申で、「助教授」、「助手」らの新たなあり方が提示された。当初、見直されるとされていた「助手」という名称を巡っては、現在継続の方向で検討されていることが判明した。そのような審議状況を巡って本学の助手制度のあり方については、未だ全学的な審議は進んでおらず、2007年4月から施行の予定とされているものの、各研究科による対応は異なっている。運動文化科における助手の業務については、大学教育研究開発センターが立ち上がった当初からセンター所属となっており、直接には各学部の対応に適用されるわけではない。しかしながら、インテグレーション以降、各教員の所属する学部との連携はますます深まっており、実際の現場では多くの業務を分担することとなっている。大教センターにおける業務も年々比重を増すなか、運動文化科の体制も、それらの動向と無関係ではあり得ない。

2. 本学の動向と運動文化科

法人化以降の変化や問題点は、本学においては、どのような場面で生じているだろうか。こども、さまざまな局面で深刻な問題が生じているといわざるをえない。

第一には財源問題の直接的影響である。人件費削減を目的としたコマ数減が、来年度より、現実のものとなった。各研究科では退任教員の後任は未補充（延期）となり、さらに非常勤のコマ数の削減が求められた。共通教育の各エリアには2006年度30%の非常勤財源の削減が要請された。2004年度には当初10%減という案が示されるなか、最終的には従来どおりとなったが、受講生10名以下の授業調査もおこなわれ、運動文化科においてもすでに調整をおこなった。そしてさらに来年度以降へ向けては、2007年度は非常勤講師予算を前年比20%削減、新規非常勤講師料単価切り下げ（継続者は2008年度から新単価）という厳しい条件が提示されるなか、スポーツ方法・とも抜本的な再編をも考える必要が生じてきている。実際に、2006年度には総開講コマ数が縮減され、この状況は今後も続くことになる。このようなカリキュラムの縮小は、学生にとっての履修条件の低下を意味しており、学生の要望を汲み上げ、授業を豊かに充実させていくために、新たな対策の検討は緊急の要件である。

他方、全学共通教育のカリキュラム改革が進行しつつある。全学教育ワーキンググループ（全学WG）による提案（中間報告）のサウンディングが各教授会でおこなわれたが、そこには「運動文化」が欠落しているという事態があった。改革の主眼は、当初、中期計画に則り、「構想力ある専門人・理性ある改革者・指導力ある政治経済人の育成」を目指し、教育の再編・高度化を目指すものとしての新教育カリキュラムの導入の検討におかれていた。WGのこの間の報告については、第一に、5月に提起された案は、英語におけるコミュニケーション・スキル向上への取り組みに特化され、第二に、そのため、全学共通教育全体の総括をふまえた全体的な議論の必要性が指摘された。それらの反応をふまえ、1月に提出された中間報告においては、新しい時代状況に対応する主体的自律的市民の育成に必要な新しい教養教育の必要性が訴えられ、それにふさわしい学部教育、大学院教育そしてそれと有機的に連携する全学共通教育のあり方

の検討が示されたのである。しかしながら、そのような理念とは異なり、本学における「新時代の全学共通教育」の構成においては、メソッドやスキル獲得へが強調され、体制についても疑問が残る案となった。このような中間報告に対して、社会学研究科においては、全体として知育・スキル獲得に偏ったものであり、身体性や自然性が軽視、それらを含めたトータルな人間像の提示が欠落という印象は免れないという指摘がなされた。また、全学教育を担っている各エリアとの協議もなく、また過去の業績の総括もなされないで WG 案が示されたことに対しても、強い批判や不快感が表明された。改革は、2008 年度からの実施が目指されており、全学的な議論の動向を把握し、今後の大学改革について注視しつつ、強く意思表示をしていく必要がある。

学部教育との関連では、社会学研究科において、インテグレーション教員のサバティカルスケジュールへの組み込みが教授会において了承された。現時点で全学共通教育と連携するものではなく、実際には当該エリアにおける協議のもとでの運営となるが、1996 年に行われたインテグレーションの実質化の完成に向けては大きな一歩であるといえるだろう。

運動施設管理業務に関しては、予期しなかった問題が判明した。就業時間の把握に作業員さんとの間で行き違いが生じていたのである。これは数年来常態化していたと考えられるが、これまでおこなわれてきた早朝の教育環境整備の多くが、担当していただいていた方のボランティアで支えられていたことが判明したのである。今日大学の厳しい財源状況のなかでは、業務内容と時間帯も含めて見直しをする必要に迫られていた。だが、大学が業務委託会社と交わしている時間帯では、とても授業に必要な業務を行いきれるものではなく、天候や使用状況によっても、日々業務の調整が必要となってくる。そのため、担当会社、担当者が変わったとしても、従来どおりの水準で管理業務を遂行していただけるように業務契約（特に就業時間）を確認するべく学務課を通して調整を図っていた。幸い 2006 年度には業者の変更はあったが担当者の変更はなく、就業時間も希望通りにしてもらうことができた。

しかしながら、本来的には、運動施設管理業務は、授業のみならず課外活動も含めた教育環境の整備、さらには大学施設の保全・管理に関わる問題であり(旧国立大学の施設管理のずさんさはメディアによって指摘されているところである。『朝日新聞』2005 年 7 月 27 日)、それらは大学として当然保障すべき類のものである。それらをすべてコストダウンの対象として一律に削減するのであれば、それは単なる教育環境の悪化を招くだけである。施設条件が教育活動の基盤の重要な一角であることの認識を促すよう強く求めていく必要がある。

施設状況については、2007 年度取得を目指している大学機関別認証評価の外部評価基準にも、「大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性」が項目としてあげられている。また、「キャンパス・アメニティの形成・支援のための体制の確立状況」もあげられ、授業といった限定された側面だけではなく、大学を学生の生活の場という全体的な視野から施設状況を考えることが必要とされている。とりわけ、建築物の耐震偽装事件やアスベスト問題が公になる中で、築 27 年となる国立体育館の安全性の増強が求められているともいえる。現実に、本学においても、体育館は対象外となったが、相模湖合宿所および国立 RC 宿舎において撤去対象のアスベスト使用が発覚している。これらは、再調査の際に発覚したものであり、施設管理の徹底を訴える必要がある。

2006 年には上記認証評価取得のための準備として、2000 年度におこなわれた全学アンケート

トが再度施行される。施設問題の重要性を認識するよい機会となろう。

近年、学生の心身の健康問題が重視されつつあるなか、評価基準においても「学生の心身の健康保持・増進及び安全・衛生への配慮の適切性」が大学に求められており、そこにおける運動文化・健康科学の諸科目の意義は高いと考える。

学生への授業満足アンケートにおいても、スポーツ方法についての満足度は例年 80%前後の高い数字を示しており、健康維持、技能の習得といった面だけではなく、友人・仲間関係の構築や交流といったコミュニケーションの面でも貢献していることが示されている。心の健康についても、保健センターとの協力体制をさらに深めていくことが重要である。

AED(自動体外式除細動器)の購入が、人事労務課により決定されたことも、近年の社会状況を反映し、大きな成果といえるだろう。しかしながら、2006 年度より保健センターの東分室が閉鎖される見通しであることは、実技授業時の救急体制についての問題を抱えることとなる。昨年度は熱中症についての講習会なども開催(2005 年 7 月 28 日)され、学生の意識を喚起するためにも、学内の医療体制や、それとの連携のあり方を緊急に構築する必要がある。

多くの問題点が指摘されるなかで、2004 年度から除かれていた概算要求事項に、2006 年度検討事項として「施設整備事業費」に「体育館改修」が「復活」したことは、これまで粘り強く要求し続けてきたことの一定の成果ともいえよう。昨年度、学長・副学長との懇談(2005 年 2 月 17 日)においても、文科省予算など厳しい状況への言及は変わらないものの、事務局長からは本学の運動施設の貧弱さについては認識しているという発言もなされている。「新体育館」が困難な状況を鑑みれば、「改修」というかたちでも、その必要性を訴えることは重要である。残念ながら概算要求の 2006 年度内示では体育館改修は採択されなかったが、今後も交渉を重ねることが必要である。そのためにも、昨年度は実現しなかった学長・副学長との懇談を、来年度は適宜設定し、一橋大学における運動文化科の長年の成果を訴え、体育・スポーツ文化の大学教育における意義を具体的に発信し続けることは重要であろう。

(坂 なつこ)

・ 2005 年度の教育活動の成果と課題

1 . カリキュラム編成と体制

< 体制 >

- ・ 専任教員 8 名。
- ・ 坂なつこ講師が在外研修(アイルランド)から戻った。
- ・ 非常勤講師は 10 名。担当コマ総数は 23.5 コマ(昨年度は 10 名、26.5 コマ)で 3 減である。運動文化科目開講コマ数(教養ゼミ含む)に占める非常勤担当コマの割合は約 46.5 パーセントである(昨年度は、54.6 パーセント)。

< 開講コマ : 全学共通教育、学部、大学院 >

全学共通教育科目における運動文化関連科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して 50.5 コマである。

< 全学共通教育および学部・大学院：授業内容別開講コマ >

	2005年度		2004年度	
総開講コマ数	77.5	通年コマ	69.5	通年コマ
全学共通教育開講コマ	50.5	通年コマ	48.5	通年コマ
・方法（療育コース）	31	(1)通年コマ	31	(1)通年コマ
・方法	25	半年コマ	25	半年コマ
・健康・スポーツ科学	8	半年コマ	7	半年コマ
・教養ゼミ	6	半年コマ	3	半年コマ
学部教育・大学院コマ	27	通年コマ	21	通年コマ
・学部講義	5	半年コマ	4	半年コマ
・学部ゼミ	15	通年コマ	11	通年コマ
・大学院講義	5	半年コマ	4	半年コマ
・大学院ゼミ	7	通年コマ	6	通年コマ

< スポーツ方法：種目別開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2005年	(2004年度)	2005年度	(2004年度)
テニス	9	9	7	7
バスケットボール	2	1	2	2
バドミントン	6	5	3	2
サッカー	4	5	2	3
バレーボール	2	3	1	1
軟式野球	0	1	1	1
ソフトボール	2	1	0	0
卓球	-	-	0	1
ジャズダンス	1	1	2	2
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
剣道	1	1	2	-
フラッグフットボール	1	1	-	-
陸上	-	-	0	0
器械体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	2
ヨガ	-	-	0	1
療育コース	1	1	-	-
合計	31	31	25	25

2 . 2005 年度の教育活動の成果と課題

(1) スポーツ方法

2005 年度のスポーツ方法 の全体的特徴

毎年度末に実施している「スポーツ方法に関する調査」の結果によると、2005 年度のスポーツ方法 全体の「満足度」(「大変満足」と「まあ満足」と答えた者を合計した割合)は 2004 年度に比べてわずかにポイントを下げている。しかしながら、受講者の中で「大変満足」「まあ満足」と答えている者は、28.3% (2004 年度 : 35.8%)、45.8% (2004 年度 : 43.1%) であり、合わせると 74.1% (2004 年度 : 78.9%) と例年どおり高い値のまま推移していることが分かる。また、「やや不満」「大変不満」と答えている受講生も合わせて 4.6% (2004 年度 : 4.3%) と、例年同様、低い割合となっている(時系列的な「満足度」の変遷については巻末資料を参照のこと)。われわれは、高い「満足度」に自信をつけると同時に、昨年に比べてこの値が下がった理由の究明と、「不満」を表明した 40 名ほどの受講生が、どのような点に不満を感じているのかについて知り、受講生の学習がより促進されるようなスポーツ方法の授業をつくっていかねばならないであろう。

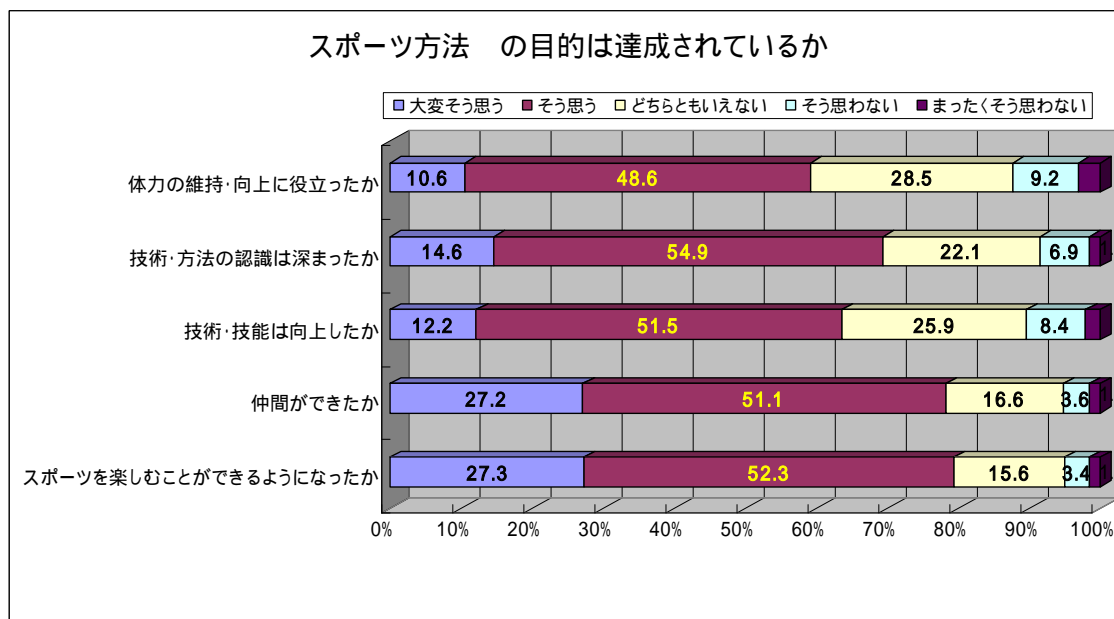
さて、スポーツ方法 の目的は「()基礎的な体力の養成」と「()スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得など)の養成」「()グループを通しての人間関係の形成」である。2005 年度より、「スポーツ方法に関するアンケート」の中に、履修した授業において、これらのスポーツ方法 の目的が達成されたかどうかを問う質問項目を設けた。

それによるとスポーツ方法 の授業が「体力の維持・向上」に役だったと答えている者は 59.2% (「大変そう思う」10.6% , 「そう思う」48.6%) にものぼる(下図参照)。週に 1 度の運動によって彼ら・彼女らの体力が実際に維持・向上しているかについては疑問が残る点ではあるが、スポーツ方法 の授業が彼ら・彼女らの運動欲求を充足させるための貴重な時間になっているということは事実であろう。しかしながら、スポーツ方法 の授業は、単に、受講生の身体を動かすことのみ重点をおいたものではないし、また、それだけでは受講生は満足しないであろう。それは、自由記述の「不満な点」に「試合ばかりでなくもう少し練習形式をとって欲しかった」という意見や「戦術や技法の教授が少なかった」「技術的な指導をもっと欲しかった」などの意見が提出されていることから理解できる。受講生は、「うまく」なりたがっているのである。その点で、「技術・方法の認識の深まり」「技術・技能の向上」について、それぞれ 69.5%、63.7%の者が肯定しているということは一定の評価ができるが、1 年かけて、自らの認識の深まりや技術・技能の成長を実感できない者がそれぞれ「どちらともいえない」「そう思わない」「全くそう思わない」を足すと 30.5%、36.3% いるという事態はやや問題であるとも考えられる。われわれはこれらの受講生の数が少しでも少なくなるべく、授業を工夫していかねばならないであろう。

「仲間ができたか」という質問に対しては 78.3%の者が「大変そう思う」「そう思う」と回答している。自由記述の「満足した点」にも「みんな仲良くなった」「仲のよい友達できた」などの意見が多く出されている。多くの授業でグループでの学習が行われているが、これらの成果がこの数値に表れているのだろう。しかしながら、自由記述の「不満な点」に、

「班以外の人と仲良くなれなかった」「1年間同じグループだった」という意見をあげている者もいるので、グループ間の交流などを工夫する必要があるとも考えられる。

そして、総合的にとらえて「スポーツを（受講したスポーツ種目を）楽しむことができるようになったか」という問いに対して、79.6%の者が「大変そう思う」「そう思う」と答えている。われわれは、主体的に自己の能力を伸ばし、仲間と教え合い・学び合いができ、総じて、スポーツを楽しむことのできる主体の育成をめざしている。このアンケート結果からは、それらの目標をある程度は達成できていると評価できるのではないかと。もちろん、これからもたゆまず努力をしていかなければならないのだが。以下に、年度末に提出された授業担当教員からのアンケートをもとに、それぞれの授業での工夫・努力についてみていきたい。



授業の内容と方法

<年間スケジュールの工夫>

ほとんどのスポーツ方法の授業は4月・5月には「基礎技術・ルールの解説」「基礎技術の練習」を行い、6月・7月にはゲームを用いた授業をはじめ、冬学期には「リーグ戦」を中心とした授業をするといった年間スケジュールで展開している。

たとえば、藤田のテニスでは「第1回のオリエンテーションの後、第2～4週の3回は初心者向けの練習メニューを藤田が用意して班別練習をし、Gストローク・ボレー・サービスについての練習要領を体験したうえで、第5週目から班毎に独自の練習計画を立てさせ（経験者から順に輪番制のリーダーが1週間前までに練習計画を立ててくる）、冬学期の12月中旬からの班対抗のリーグ戦が始まるまで、班別練習を基本にした」。また、高津のサッカーでは「夏学期はハーフコートのミニサッカー」を行い、冬学期に「11人制サッカー」を実施するという展開をとっている。尾崎のテニスでも「夏学期は基礎技術の練習を中心とし、冬学期の最初はゲーム形式を取り入れ、11月下旬からグループ対抗のリーグ戦を実施した」。

これには主に1)「受験期で弱っている体力を徐々に回復させていく」2)「技術を系統的に学んでいく」3)「グループでの学習を促進する」ということをねらっているためであると考えられる。

1)に関しては、受験期のセデンタリーな生活から急激に高度な運動強度へともっていくと

危険をともなうことにもなる。また、入学して間もない受講生は新たな生活の中で身体的にも精神的にもストレスがかかっている。したがって、徐々に体力が回復し、大学生活に身体が慣れていくことを待つ必要があるのだ。また、その間、担当教員は、受講生一人ひとりの体力的な特徴や技術レベルの相違などを把握し、その後の授業の展開を構想し直すのである。

2)に関しては、スポーツ方法の授業には初心者が多く含まれるため、「基礎技術」の習得から「高度な技術」の習得へと課題を設定することにより、より効率的な学習を促すためにこのような工夫が必要となる。

また、3)については、ほとんどの授業でグループ学習が採用されているため、基礎的な練習方法を初心者にも共有させる時期が必要となる。したがって、4月・5月の段階では、教員が練習方法を提示し、その後のグループでの自主的学習への「軌道のせ」を促すようにしなければならないのである。

<グループ学習に関する工夫>

先述の通り、ほとんどの授業においてグループで自主的に練習メニューをつくって学習をすすめていくという方法がとられているが、グループ学習はそれぞれの学習集団の課題に応じた進度と方法で学習が促進されるという半面、うまくグループが作れない場合、学習が阻害される危険性もある。したがって、それぞれの授業担当者は、いかに学習する雰囲気をもったグループをつくっていくかについて苦心をしている。

たとえば、鬼丸のテニスでは次のような工夫がなされている。「ここ数年グループの関係作りに注意しているが、授業終了前の反省ミーティングの時間を雑談を混ぜながらも十分とっているグループは関係作りもうまくいっているようで、逆にあっさりともミーティングを終わらせているグループはなかなかうまくいっていないと思われる。両者にある意味の関連があることが(今更ながら)わかってきたので、ミーティングのうまくいっていないグループには途中から特に気を配って、声を掛けたりコート整備を手伝ったりしてみた。それで学期終わりころにはグループのまとまりが全体的にでてきたように感じられる。授業への満足度も(グループ作りの観点からは)次第に上がってきたように思われた」。また、岡本のフライングディスクでは「まじめに練習計画を立て、一生懸命に練習するチームが負けてばかり」いた際に、「教員が試合に加わり、勝利を経験させるようにし」、グループの雰囲気の悪化を防いでいる。

グループづくりの成否は授業全体の成否を決定づける大きな要因となる。しかしながら、これはグループに集まる受講生の技術レベルや性格に左右されることが多く、こうすれば必ず成功するという方法がなかなか見つからないのも事実である。実践交流会などで各教員の経験を共有する機会をもつ必要があるであろう。

また、グループ学習には、技術レベルの差異による不満が、経験者・初心者の両方から表明されることもある。経験者の不満は「(グループ内の初心者に)教えてばかりいて、自分のレベルにあった技術習得ができない」といったものであり、初心者の不満は「経験者ばかりが試合の中心になり、自分たちが活躍できない」というものである。このような場合には、初心者と経験者のグループが分裂したり、グループ替えの希望が出されたりする。内海はソフトボールの授業で目標を「全員が主人公になるソフトボールを創る」とし、「守備につい

では1イニング毎に守備位置を巡回し、9回ですべてのポジションを経験」させ、「打順は前回は終了した次の人から今回は出発する」という工夫をし、「上手な人だけがスターポジションを占め、苦手な人を『お客さん』にさせない」ようにしている。そして、「これらは受講者には概ね好評であった。特に不得手者も平等に経験することができ、上達することができたこと。そこから不得手者を支える助言なども積極的に生まれたことが、チームワークを形成する上で大きな力となった」と評価している。また、藤田はテニスの授業で「途中で1回だけ班を解体して、ストローク練習・ボレー練習・サービス練習用のコート（それぞれのコートに経験者を配置して初心者の練習相手をする）をつくり、各自が集中的に自分の好きな練習をする日を設け」という工夫をしている。

グループでの学習の授業は難しい、しかしながら、成功すればその効果も大きなものとなる。以下の高津のテニスの授業に関する言葉は、氏のみ考えではなく、われわれに共有されているものである。したがって、われわれは互いの経験を共有し合い、グループでの学習をうまくつくっていける授業の方法を発展させるべく努力をしていかなければならないであろう。

「班分けに失敗したかも（しれない）。各班の技術レベルに差がありすぎた。やる気のある班とやる気のない班の差が激しかった。『グループは固定しないほうがよい。』という感想もある。だが、強い班、経験者の多い班がまとまっているとは限らない。経験者の全くいない班が、1番まとまっていて、班対抗戦で勝ったときなど、全員がすごく嬉しそうだった。異質集団による班（グループ）編成の原理は、学生に支持されていると思う。じつは、これが私の授業の最大のポイントなのだ。（高津：テニス）」

その他

< 性差への配慮 >

スポーツ方法 の授業は男女混合でクラスが構成される。男女には体力的・技術的に差異が存在し、一緒になってゲームをするような場合、一定の配慮を行わないと学習が阻害される場合がある。たとえば、岡本のフライングディスクの授業では、アルティメットのゲーム中、女子学生と男子学生が強く接触し、女子学生が怪我をして数週間にわたって見学を余儀なくされるという事態が生じた。例年この授業では「女性はディスクに触ればパスが通ったことにする」という女子ルールをつくって、女子がゲームから排除されることを防ぐように配慮してきたが、怪我を負う女子学生が出るという事態を受け、「女子とディスクを競り合う場合、男子は女子にゆずる」というルールを設けて、男女がゲーム中に接触するという事故が起こらないように気を配った。また、「ゲーム中に夢中になり、男女がまわらずに突進してしまうような男子受講生には、ゲーム中に常に声をかけて、注意を促すようにした」。このことにより、その後の事故は防げたのだが、サッカーやバスケットボールなどの、夢中になりすぎてボディコンタクトが生じてしまうような他の種目における「性差への配慮」について、それらの授業担当者とも対策を協議する必要があると思われる。

ゲームから女性が排除されないような工夫としては、内海もソフトボールの授業において、守備の際の「女子ルール」を設けることによって対処している。

<雨天時の授業の工夫>

屋外種目において雨天時の授業は常に悩みの種である。ルールや戦略・戦術について集中的に説明を行いたい時期には、そのような時間にあてればよいのだが、天候ばかりは授業担当者の都合を聞いてはくれない。2005年度は比較的天候に恵まれたのだが、連続して数週間にわたって教室での授業を強いられるような場合、受講生の学習意欲は減退してしまうことになる。内海のソフトボールでは、「教室で『現代青年の育ち方と人間関係』として、ビデオを見て、若干の討論を行」ない、「『引きこもり』『ニート』等、自分とは無関係とと思っている学生が多かったが、実は彼等もその可能性を抱えていることを自覚した人も多かった」という成果をあげている。この場合、ソフトボールというテーマから少し離れることになるのだが、たとえばそれぞれの種目の技術認識を深めるような雨天時の授業とはどのように構想されるのか。これまで、高度なゲームのビデオなどを教材として利用して学習を促すという工夫がなされてきてはいるが、他にも雨天時の利用の仕方は考えられるであろう。「雨になったから仕方なく対処する」というものではなく、雨の日があることも織り込みずみの授業を構想することもわれわれの課題である。

<TAによるアシスト>

2005年度のスポーツ方法では唯一、岡本のスポーツフィットネスの授業でティーチング・アシスタント(TA)が採用された。この授業では毎回授業の冒頭に体重や体脂肪率、血圧などの測定を行うが、TAが採用されたことにより、これらの機材の準備、片づけがスムーズに行われ、担当教員が授業に例年以上に集中できるようになった。また、スポーツフィットネスでは冬学期に健康法・トレーニング法のグループワークを実施させるが、TAがディスカッションに加わることによって、受講生の学習が促進された。

療育コース(担当:尾崎)

受講生は2名。

療育コースを受講するに至った経緯、条件がそれぞれ異なるので、学生へのヒアリング、医師の診断書の提出と検討、など、それぞれの身体の状態等の把握が授業の導入部であった。

夏学期は、まず、身体をほぐすことをねらいとして、自分の身体の状態にあったストレッチやサーキット・トレーニングなどの組み立てを行った。

スポーツ種目としては、ダーツを実施した。NHK教育TVでのダーツのシリーズ番組を教材としたり、ビデオ撮影で投球(矢)フォームをチェックしたりした。

冬学期は、2人とも身体の状態が改善されたこともあり、協議の結果、テニスを同時並行的に実施した(2人ともテニスは初心者で、「やってみたい」との希望があった)。場所は、昼休みはテニスコート、正規な時間(3時限目)にはバレーボールコートを用いた。

これらの内容について、受講生はいずれも意欲関心を持続させながら取り組むことができた。

授業の合間に身体の状態の問診だけでなく、学生生活等の話題にまで及んだのは少人数であることの利点といえるであろう(私には専門知識はないので「カウンセリング」というまでのことはできないが、授業の場面でさまざまな会話をすることの意味は小さくないと思わ

れる。

(2) スポーツ方法

受講者の傾向と特徴

2005年度のスポーツ方法 全体(25コマ開講)の受講生は537名であった。学年別内訳は1年4名(2004年度:11名)、2年197名(2004年度:158名)、3年138名(2004年度:156名)、4年196名(2004年度:295名)、留学生など2名となっており、2年生の受講者が増加し、4年生の受講者が100名も減少している。また、学部別の受講者数をみると商学部182名、経済学部138名、法学部93名、社会学部122名と大きな偏りがみられる。これらが2005年度のみ傾向なのか、例年どおりの傾向なのかを検討し、今後の開講時限の工夫などに反映させていくことが必要であろう。たとえば、学部の専門授業とのバッティングをできるだけ避けることや、また、4年生の受講が増加する冬学期に多くのコマを開講するなどが考えられてもよいであろう。

スポーツ方法 を開講してから、受講生数は年々増加していく傾向にあったが、残念ながら2005年度は昨年度を下回る受講生しか集めることができなかった。ここ数年の推移をみると、2003年度575人、2004年度621人、2005年度537人となっている。受講生の絶対数が減少していくことは問題ではないが、2004年度と同様の25コマの開講に対して人数が減ったということは十分に検討されねばならない事態である。

授業担当者のアンケートからは、より充実させた授業を展開するには人数が少ないという意見が提出されている(バレーボール、サッカー、テニス、フライングディスク)。それぞれの開講種目には授業をする上での適正な人数が決められているのだが、数年度にわたって適正人数に達しない授業に関しては隔年開講や別の種目への変更などが考えられるべきであろう。また、例年、問題とされる抽選後の「振り逃げ」(途中退出者)についても、その数を見込んだ適性人数(定員)の設定などが工夫されるべきである。

授業の内容と方法

スポーツ方法 の授業は、例年サークルなどからの参加者(経験者)が多く、高度なレベルの学習の場となる(内海:軟式野球、尾崎:テニスなど)。このことは、スポーツ方法 の授業において欲求不満を感じていた経験者に達成感・充実感をもたらすことになる一方で、初心者が最初から臆して受講しなかったり、授業の中で疎外感を感じてしまうということになる傾向をももつ。他方、経験者が初心者を早く高いレベルまで引き上げようとし、初心者がそれに応えようとすることによって学習が促進されるという効果も期待される(坂:バドミントン、岡本:フライングディスク)。

そのような異質集団による学習効果を積極的に引き出すために授業担当者は授業の方法で苦心している。たとえば、「最初の時期はレベル別に分けて授業を進めたり(尾崎:テニス)」、女性が排除されない雰囲気をつくることを心がけたりなどの工夫がなされている(坂:バスケット)。また、授業の最初と最後に十分な時間をとって受講生の相互交流の場として重視している授業もある(上野:バドミントン)。2004年度の本項で藤田が指摘するように、テニス、ゴルフなどの個人種目に関しては「初心者コース」と「経験者コース」などを分けるな

どの工夫が検討されてもよいであろう。

われわれは、上記のようなスポーツ方法の授業の特徴（受講生の特徴）をふまえ、この授業の良さを最大限に引き出すための授業方法を考えていかなければならないだろう。たとえば、藤田が2004年度の本項で述べている「通年授業」や「学外施設を利用した集中的授業」など、多様な形態が模索されるべきである。（岡本 純也）

以下は2005年度の授業担当者の授業概要である。

（早川武彦）

種目：テニス（火2・夏）

受講生 5名

これまでにない少人数でのびのびとできた。ただ、欠席者がでると試合が上手くできず授業運営上は苦しかった。ゲーム展開における攻防戦術を意識するよう心がけたが、動きとしてそれが現れるまでにはかなり時間がかかった。

種目：テニス（火1・冬）

受講生 32名 2年生：9 3年生：9 4年生 14

Fが3（2年生）、2（3年生）、6（4年生）名と3割になったことは授業方法にやや問題があったのではないかと反省しているが、4年生の場合とはもかく2、3年生での脱落者は、なぜなのか検討に値しよう。

授業は、比較的経験者が多く、講義要項に掲げた内容を消化できた。掲げたテーマはゲームを通して攻め、守りの戦術を考えるであった。技術的な差はあったがダブルスを中心としたゲーム展開で ポジショニング、 モーション、 ゲーム展開のリズムなどにそれぞれ意識することをポイントとしてあげたが、いざゲームとなると勝負に拘りポイントを自覚しないまま終わるケースが多かった。ゲームはなるべく多く対戦できるよう4ゲーム先取としたが、3ゲームを消化するのがやっと。といって3ゲームにしてはゲームのリズムが掴みにくく、この点での適正ゲームがどのくらいかを検討していく必要を感じた。

（藤田和也）

種目：ゴルフ（木2・夏（初心））

受講生 21名 単位取得者 18名

初心者を対象に、スウイングの基本（グリップ、スタンス、セットアップ、スウイング）とミドルアイアンによるショットの習得を目標に授業を進めた。プラスチック・ボール、バードゴルフ、実球などによるショット練習を4～5人のグループに分けてサーキュレートしながら練習し、途中で、ビデオ撮影によるフォームチェック、バードゴルフ・コンペによるラウンドの仕方やルール体験、バレーコートでのアプローチショットの練習、グリーンでのパッティングの経験などを折り込み、最後の3週は民間のゴルフ練習場で授業をし、自分が打った球の方向や落下地点が確認できる練習をした。

種目：ゴルフ（水2・冬（経験））

受講生 15名 単位取得者 10名

経験者を対象とすると講義要綱には案内しておいたが、初心者が半数含まれていたため、最

初は初心者を対象とした授業を進め、中盤から経験者（といってもせいぜい夏学期の受講者程度で、初心者に近い）を前提にした練習メニューと練習の重点の置き方（ヘッドスピード、ロングアイアンやウッ드의ショット、アプローチショットの距離感、パッティング、バンカーショットなどの体験）をした。民間のゴルフ練習場での授業も4回に回数を増やした。最後の授業でショットの比較的安定した学生を対象にショートコースを体験させる予定であったが、当日雨天のため中止した。

（高津勝）

種目：サッカー（火2・冬）

（1）履修状況：受講登録者=24名。単位取得者=17名。単位希望せず出席=1名。0～2回出席=6名。大学院生=1名。OB=1名。

（2）例年よりリピーターが少なく、かろうじて10人制サッカーをすることができた。未来は明るくない。昨年までは、特定のサークルをベースにして固定客がいたのだが。新年度はワールドカップの年だから、少しは増えるかもしれない。

（3）内容はゲーム中心。というか、受講生はそれ以外のことは望んでいない。彼等にとってこの授業がこの大学の授業の中で1番充実しているのかもしれない。だが、つねに11人制のサッカーができるほどの受講者数を確保するのは難しいというのも実情もある。

（4）受講者数が少ない分、私も、審判に、人数の穴埋めにと、フル稼働せねばならず、ゲームや授業展開を客観的に見る余裕はなかった。

種目：テニス（火2・夏）

受講状況：28名（うち単位取得者=22名）。2年=13名。3年=6名（うち1名は病気で中途離脱。1名は1回のみ出席）。4年=8名（うち1～2回のみ出席=2名）。

実施状況：経験者、とくにサークル経験者に依拠し、彼等に助けられて行った授業という感がある。そのなかで、教師自身も上手くなるうとした、ということか。いや、結果的に、そういうやり方の授業になったのだと思う。教師が被験者になって、テニスサークル員の指導力を試す、といった授業展開。彼等と一緒にゲームをして、そこそこのことをやらないと教師として迫力は無いように思うのだが、どっこい、そうはさせてもらえない。ゲームが終われば、学生もそれなりに心得ていて、教師を傷つけないようにしているようだ。彼等にとってはテニスを楽しいいい機会だし、教師としても楽しく授業をやりたいと思っている。

（内海和雄）

種目：バレーボール（水2・夏）

受講生14名（単位修得10名）

「A：10（71%）」「B：0（%）」「C：0（%）」「D：0（%）」「-：4（29%）」

バレーボールとして、せめて4チーム、24人が履修してくれると大いに充実したものとなるが、残念ながら14名であった。その内単位修得者は10名であり、この点が少々残念である。参加した学生は、授業目標の「全員がスパイカーのバレーボールを作る」に賛意を示し、充実した。それ故、リピーターが何人かいた。その他、飛び入りも歓迎しながら、どうか毎週対

抗戦はできた。

コートコンディションは管理の良さから、最高であった。

種目：軟式野球（水2・冬）

34名（単位修得22名）

「A：8（24%）」 「B：8（24%）」 「C：3（8%）」 「D：3（8%）」

「-：12（35%）」

授業の目標は「全員が主人公になる軟式野球を創る」である。具体的には守備については1イニング毎に守備位置を巡回し、9回ですべてのポジションを経験する。これによって、上手な人だけがスターポジションを占め、苦手な人を「お客さん」にさせないためである。そして打順は前回に終了した次の人から次回は出発することにした。このルールは概ね好評であった。

軟式野球はソフトボールと異なって、ピッチャーの制球力が試合の内容、授業の進度を大きく作用する。それ故、練習においてもキャッチボール、ピッチングを重視した。そして、時間的制約から打撃練習はできなかった。

野球同好会から7～8名が参加した。これによって授業はかなり水準が高まり、充実した。しかし、一方でそれに付いて行けない初心者がリタイアをしたのではないかと想像される。この点の克服は来年の課題である。

（上野卓郎）

種目：バドミントン（木3・夏・冬）

夏（男21、女11、2年15、3年8、4年9） 冬（男23、女9、1年1、2年17、3年8、4年6）。全欠、それに準じる者が夏3（2、3、4年各1） 冬3（4年）。夏の方が極めて活発でレベルも高かった。4年の力が大きかった。冬の方は夏の継続者が9人もいたにもかかわらず、ややレベルはダウンした。4年の力の減少もあったが、夏と違ってリーダーシップをとる者が少なかったからであろう。夏冬とも開始時に一人ひとりその日の目標、テーマを、終了時に結果、課題を発表してもらう方式を今年も続けた。考えていることが分かり合えて良かった。

（尾崎正峰）

種目：器械体操（火2・夏）

14名の受講生。

「非日常」的な動きを中核とする体操競技に最初はとまどっていた学生も多かったが、それぞれが熱心に取り組んだ結果、それなりの演技水準にまで到達した。

体操競技の場合、技の「達成感」が明確であるので、どんなに簡単な技でも「できた」ときの手応えは学生にとって大きいものといえる。

種目：テニス（火2・冬）

「初心者・初級者を想定している」と講義要綱には明記してあるが、従来からと同じく経験者、とくにサークルに所属する学生の受講が目立った（25名の登録の中で、15名程度）。

そうした状況でもあったため、最初の時期はレベル別に分けて授業を進めた。

教師は、講義要綱に記したように、「初心者・初級者」を中心に指導を行った。ただし、まっ

多くの「初心者」は少なかったので（「方法」でテニスを採った）等、1ヶ月を過ぎた時点でゲーム中心のメニューとした。

それ以後、レベルをミックスしたゲームを実施できるようにもしたが、なかなかその「壁」が越えられない感じであった。この辺の所で教師がどのように絡むべきか、今回は、あまり明確なことはできなかった（サークル所属の学生の人数が多かったことも一因といえるかもしれない）。

（岡本純也）

種目：フライングディスク（金2・夏・冬）

受講生数 = 夏 19 名，冬 25 名（通年受講者 7 名）

これまで私のフライングディスクを受講した者が夏学期から 5 名参加した。彼らの存在により初心者の技術習得もスムーズに行われ、基礎的な練習を 3 時間ほど行った後に、すぐにアルティメットのゲームに入った。冬学期は夏学期からの受講生が 7 名おり、こちらも数時間でゲームを行えるほどになった。

冬学期は例年よりも多い受講生が参加したので、3 チームをつくり、チームを固定させようと試みたが、遅刻者や欠席者が数人であることにより、たちまち流動的な 2 チーム編成となってしまった。せめて 30 名がコンスタントに参加するようになると固定チームでの授業が展開できると考えられる。

概して彼らはゲームをすることに満足しているのだが、リピーターも育ってきたので、そろそろ、より高度な戦略・戦術を使って試合を行うレベルまでもっていきたいと考えている。そのために来年度は、ビデオを使ってゲーム分析を行うようにしたい。また、できればグループノートを利用した授業も展開したい。そのためにも、30 人の受講生が集まることを期待する。

例年のことながら、この授業は非常に雰囲気がよく、学年を越えて仲間づくりが行われていた。冬学期最後には打ち上げのコンパがあり、また、それだけではなく、2 月半ば現在、4 年生の「追い出し試合」をやろうと 2、3 年生が計画をたてている。

（坂なつこ）

種目：バスケットボール（水1・夏）

女子が 10 名参加し、非常に活気のある授業となった。ほとんどが運動部かバスケ経験者であり、ハンドを設ける場面も少なく、また設けてもそれほど違和感のあるものではなかった。経験者、男子プレイヤーも、未経験者や女子が楽しめるような雰囲気作りを心がけるようになり、よい結果を生んだと思う。今後も女子や未経験者が参加しやすい体制をつくっていききたい。

種目：バドミントン（水1・冬）

経験者、未経験者をミックスし、2 グループに分け毎回対抗戦とした。経験者がリーダーシップを発揮し、最初は未経験者が萎縮する場面もあったが、経験者と組むことやプレイをみることで未経験者の技術が徐々に磨かれていったし、経験者も丁寧に指導してくれていた。経験者からも、ミックスグループはいろいろな人と組めて楽しいという意見をもらえた。

(鬼丸正明)

種目：テニス(木1・夏)

受講者 29 名中、初心者 6 名、初級者 11 名、中上級者 12 名。単位取得者 26 名。どうしても初心者がマイナー意識をもちがちな人数構成になってしまうので、初心者を優先的に受講させることはできないだろう。

授業そのものは初心者中心の練習であり、中上級者もよく協力してくれていた。

(白河善美)

種目：ジャズダンス(月2・夏・冬)

とても創作力がある学生がいたので楽しかったです。

(H. ポルスター)

種目：バスケットボール(火1・夏)

No problems occurred teaching this class. Students enjoyed playing basketball at a high level and with remarkable efforts. Some students with leadership abilities organized team formations by themselves. Another student made his own contribution for exercising special basketball drills. Noteworthy to mention is also - the collective integration of students with less skillful basketball techniques.

種目：サッカー(火1・冬)

A very pleasant soccer class, even though there was rarely a chance of playing full 11-men teams. Surprisingly 2 novice soccer students improved very well during this half-year course. The individual preconditions for soccer were very heterogenic in the class. However, small field play and group exercises helped to guarantee benefits for everybody.

(柴崎涼一)

種目：テニス(金・1 夏・冬)

夏 - 昨年までこの時間帯は卓球の授業だったせい登録者が 11 人と少なく、指導は十分にできましたが試合の対戦相手が固定せざるをえず残念でした。

冬 - 登録者が 32 人で経験者も 20 人以上いましたので、基礎と実戦の両面で各自のレベルを考えながら授業を進めかなりの成果が上げられたように思います。

(3) スポーツ科学・健康科学

今年度は、夏・冬学期合わせて 8 つの講義を開講した(「ヒューマンセクソロジー」は、夏と冬のリピート開講)。受講者数(登録者数)は、100 名前後のものと 400 名前後のものに分かれたといえる。

講義のテーマ設定、トピックの取り上げ方のほか、映像資料の活用、グループ分けによる実験など講義の進め方に関する工夫が各担当者によって試みられている。

学生側の状況として、何人かの担当者から出されている点として、受講生の学習に対する「姿勢」(講義で出される課題や最終レポートへの取り組み方等)についての問題指摘がある(具体

的な内容については、下記の各担当者からの意見を参照)。

教師の側の授業改善の取り組みと学生の側の学習の展開、それぞれの課題と、両者の(あるべき)関係については、運動文化科だけにとどまらない課題を含んでいるといえよう。

以下、各担当者からの意見を記載する。

(尾崎 正峰)

スポーツ科学・健康科学「スポーツとメディア」(早川武彦 火1・夏)

登録者：86名

1/2年生用の講義としてはすこし内容を特化しすぎたかもしれない。受講生が86名と多かったので、テーマ毎にグループ化しレポートさせたが、この作業をしっかりとさせることができず、報告もあまり力の入ったものにはならなかった。1時限ということもあり、参加状況は半数くらいで、遅刻者は非常に多かった。注意したくらいでは改まらなかった。指導力のなさを痛感した。総じて受講者は受け身だった。ただスポーツとメディアへの関心はかなり高く、もう少し彼らの関心に沿った話ができたらよかったと反省している。

スポーツ科学・健康科学「地域社会とスポーツ」(尾崎正峰 木2・夏)

登録者：131名(単位取得：101)

地域社会で起こるスポーツ現象について、世論調査、子ども、障害を持つ人々、スポーツクラブというキーワードで、個別のテーマ(キーワード)で平均3回の講義を行った。

レジュメ・資料の配布、ビデオ教材の使用は、毎回。

小レポートを毎回実施した。出欠調査も兼ねることになるが、書く内容は、その日の講義に関すること、次回の講義の素材にするためのアンケート的なもの、等であった。授業にただ出ていけばよいという姿勢の学生も目立ってきているという実感から、何らかの形で「授業に関わる、参加する」という意識をもたせようというねらいもあったが、どこまで達成されたかについてはよく分からない。

数値の面から全般的に見れば、学生の出席率も概ね高く、「振り逃げ」の割合も一時期と比べると小さくなっているといえる。

下記の「授業と学習に関するアンケート」の数値の結果や自由筆記の部分で記されたものを見る限りでは、学生の興味関心を引き出したことを含めて、ある程度学生からの評価を受けていると自己評価している。

スポーツ科学・健康科学「現代社会とスポーツ」(岡本純也 水1・夏)

登録者：382名

パワーポイントや映像を映し出すプロジェクターの使用を希望し、本館改修でそのような教室の競争率が激しくなっていることを考えて従来の水曜2限の開講から1限に開講時限を移動した。ところが、それが400人にも達しようとする多人数での講義をつくり出すことになった。この時限に開講する科目が非常に少なく、とくに共通教育科目は私以外にほとんど開講していなかった。そのためか、1限であるにもかかわらず、382人もの受講生が集まってしまった。

授業の内容自体は、例年と同様に、プレイ論からエリアスのスポーツ社会学、ドーピング問

題、スポーツとメディアの問題、経済不況と企業運動部の問題とすすめていったのだが、今回はパワーポイントによる説明と、映像資料を多用した。が、学生のアンケートによれば、あまり効果はなかったようである。

これだけの人数を相手にすると授業の運営、成績の処理など非常に労力があるが、例年の人数から TA は依頼しなかった。授業が開始されて多人数と分かった段階で TA を依頼できるようなシステムを考えなければいけないのではないか。

A = 99 人 (32.9%) B = 125 人 (41.5%) C = 51 人 (16.9%) D = 26 人 (8.6%)

F = 22 人 - = 59 人

A+B+C+D = 301 人

スポーツ科学・健康科学「スポーツと映像文化」(鬼丸正明 木1・冬)

登録者：398 名 (単位取得者 362 名)

本講義は、例年受講者が教室の収容人数をはるかに越え、劣悪な授業環境にあったため、本年度から受講希望者が教室の定員を越えた場合、抽選を実施することにした。

但し、抽選の実施を決定したのが冬学期開始直前であったため、ある程度の混乱が予想されたが、学生への連絡もスムーズにいき、またオリエンテーション参加者がほぼ教室の定員と同数であったため、結果的に抽選は行わず、オリエンテーション参加者をそのまま受講決定者とした。

受講者がほぼ例年の半分程度になったため、授業環境は激変したといえる。また講師の授業負担も半減したので、来年度も抽選を前提にしておこうと考えている。

但し、オリエンテーション参加 (して受講希望の用紙 = アンケートを提出した) 者 = 受講決定者だとして、それを何度も繰り返し学生に伝えたのだが、オリエンテーション不参加で履修届け (に本講義を受講するとして) 提出した者が 26 名 (その内 4 年が 19 名、また単位取得者は 26 名中 3 名) 逆にオリエンテーション参加者で履修届けを提出しなかった者が 20 名いた。これは制度の隙間の現象とはいえ、公平性という点からは問題といえるだろう。

スポーツ科学・健康科学「現代スポーツ論」(坂なつこ 金4・冬)

登録者：135 名

常時 100 名前後の参加者。同時期に担当した学部講義とあわせて受講している人も多く、テーマにより内容が重複しないようにするのに苦労した。比較的容易にメディア等で入手できるデータなど授業で扱うのは避けたが、学生のアンケートを見ると、むしろそのような情報をほしがっており、学生との情報ギャップがあった。しかし、参考文献などについても「さすがの面倒なので紹介してほしい」等というコメントもあり、講義を安易な情報収集の場と見ている様子もみられた。講義だけでそれらの態度に応えるのは限界があるが、参考文献を紹介するだけでは、単なるスポーツへの興味や単位取得の意欲を社会科学的な関心へと結びつけることは容易ではなく、いっそうの工夫が必要であると感じた。

スポーツ科学・健康科学「ヒューマンセクソロジー」(村瀬幸浩 火2・夏冬)

登録者：夏 341 名、冬 443 名 (例年冬は数が少なくなるが今年は冬も多かった)

スポーツ科学・健康科学「運動と体力の科学」(渡辺雅之 木2・冬)

登録者：81名

<学生について感じられたこと>

筆記試験から言えば、まず授業科目名を尋ねられたこと、私の名前を確認されたことの2点がこれまでにない出来事であった。答案では、今回 AED(自動体外式除細動器)についての記載を求めたものの 59 名の受験者中たった 6 名しか書けていなかった。6 名以外は迷答・誤答ばかりで、これで、もしスポーツ中に事故が起こったらどうすんの?とツッコミたくなった。運動時の循環器系の事故は時間的に余裕がないことが多い。2~3分が生死を分けることとなるのでいざという時に的確な対応が求められる。これまで民間では使用出来なかった除細動装置が今は使えるのである。そして、人工呼吸のためのフェイスシールドを講義中に実物を見せたものだが、どうやら彼らには届かなかつたらしい。残念至極である。運動中の事故ほど本人はもとより周囲も大変心に残るものであるだけに最善の対応が望まれる。最善を尽くした上での結果とそうでない場合とで受け止められ方は 180 度異なる。悲しい事故が授業中だけでなく、部活動中にも起こらないことを祈る。

ア) 筆記試験から言えば、まず授業科目名を尋ねられたこと、私の名前を確認されたことの2点がこれまでにない出来事であった。答案では、今回 AED についての記載を求めたものの 59 名の受験者中たった 6 名しか書けていなかった。6 名以外は迷答・誤答ばかりで、これで、もしスポーツ中に事故が起こったらどうすんの?とツッコミたくなった。運動時の循環器系の事故は時間的に余裕がないことが多い。2~3分が生死を分けることとなるのでいざという時に的確な対応が求められる。これまで民間では使用出来なかった除細動装置が今は使えるのである。そして、人工呼吸のためのフェイスシールドを講義中に実物を見せたものだが、どうやら彼らには届かなかつたらしい。残念至極である。運動中の事故ほど本人はもとより周囲も大変心に残るものであるだけに最善の対応が望まれる。最善を尽くした上での結果とそうでない場合とで受け止められ方は 180 度異なる。悲しい事故が授業中だけでなく、部活動中にも起こらないことを祈る。

イ) 食育の必要性は今年も感じた。そして、それ以上に感じたことは、例えば栄養調査は何のために行うのか、何をするのかを理解していないのか、それとも説明を聞いていないのか。具体的にはこうだ。調査紙は B4 サイズ 1 枚で、三食プラス間食の食品名と重量を記入する一覧表である。三大栄養素の分析の欄もある。調査内容は、食べたものとその重量の記載である。その後、各食品のカロリー計算、三大栄養素の分析となる。問題は、その後である。こうした調査をふまえて、1日の合計エネルギー摂取カロリーの算出、朝昼夕食のカロリー比率、三大栄養素のカロリー比率、脂肪における動物性か植物性かの比率などの計算を各自しなければ意味がない。それらをまるでやっていない。表が埋まっているだけである。どんな分析をするかは板書して示した。これが通じていない原因か。表に具体的に作っておかなければならないのだろうか。疑問である。せっかく1日の各食品分析をしたのだから集計は単純作業に違いない。タイムスタディによるエネルギー消費量とのバランスが重要ということでこの摂取カロリー調査を行ったのだがそれも無意味であった。単にやれと言われた調査紙を提出しただけでそれらの相互関係など考えようとしないのである。

ウ) 筋力トレーニング実験の結果にも同じことが言える。これは全員を希望に応じて、腕立伏

勢、上体起こし(いわゆる腹筋運動)、スクワットの3群に分け、筋持久力のトレーニング効果を考えるものである。要するに反復回数の向上がトレーニング量とどのような関係になっているのかを見るものである。グループ分けの後まず前のMAX測定を行い、トレーニングプログラムを作り、トレーニングし、そしてそれを記録し、ある一定期間後に後のMAX測定を行う。その結果を翌週に吟味する段取りだ。前のMAX測定者は、腕立班28名、腹筋班36名、スクワット班8名であった。そして後のMAX測定提出は、腕立班9名、腹筋班8名、スクワット班2名であった。そのうち10月から1月までのトレーニング記録がそろっているものは、腕立班から順に、1名、0名、2名であった。また、前MAXの数値が変わっているものが2名であった。前MAX測定時に提出してもらった記録用紙をコピーした後各自に返すのだが、後MAXもそこに記載するので提出してもらったところ、前MAXが変わっていた。これは何を意味するのか。もはやデータの信頼性が根本から消失する。

(4) 教養ゼミ

本年度の教養ゼミ担当は、昨年度の3名から6名に倍加した。しかし、上野担当ではゼロで、実際には5名の担当のゼミが行われた。昨年問題となった受講生15名を超えるゼミという点では、坂担当で15名という人数で、このゼミの経験を検討する必要がある。以下、各担当者のまとめを掲載する。(上野 卓郎)

教養ゼミ 早川武彦(火2・冬)

テーマ：知的にスポーツを語る

受講者：7名

7名と比較的こじんまりしたゼミになった。前半は、幅広くスポーツ界の状況を知るために各自の関心あるテーマを報告し議論を重ねた。後半はテーマ別グループに分かれ「大学スポーツ組織」「NCAAの組織」「プロスポーツ組織」についてワークシレポート提出した。このくらい的人数がゼミとしてはやりやすいと実感した。

教養ゼミ 藤田和也(火1・夏)

テーマ：現代社会と健康問題

受講者：9名

受講者の全員が教育問題に関心をもっていたため、結果的に、教育問題にしばられた。比較的近い問題関心をもった人たちでグルーピングしてみると、3人ずつの3グループ(発達問題G、教科書問題G、教育改革問題G)に分かれた。それぞれのグループでどのような問題設定をするかのレポートと話し合い、問題のシエマ化、研究課題と方法の設定、文献探索と調査、中間報告合宿、最終報告に向けての作業とまとめ、最終報告合宿、個人レポートの作成と作品化(冊子づくり)などの一連の研究的作業を体験した。できあがった冊子の内容は以下のとおりである。

<発達問題G>

グループレポート：「何が少年を殺人事件に駆り立てるのか 少年の心の闇」

個人レポート：○少年犯罪を考える

- 殺人事件を通じて現代社会の少年について考察したこと
- 少年犯罪は一体なぜ起こるのか

< 教育問題 G >

グループレポート：「日本の歴史教育のあり方を教科書から考える」

個人レポート：○「日本の歴史教育のあり方を教科書から考える」作業を咀嚼して

- 歴史教科書のあり方を国家の内包する問題から再考する
- 歴史を考える力を育む

< 社会問題 G >

グループレポート：産業界から教育界への要請 グローバリゼーションの中で」

- 企業による教育改革
- 教育の情報化と国立大学法人化
- 国際理解教育の実践とあり方

教養ゼミ 高津勝（火3・夏）

テーマ：スポーツとは何か

受講者：3名

全員2年生。商1名、社2名。予想より少なかった。アンドリュー・ブレイク/橋本純一(訳)『ボディ・ランゲージ - 現代スポーツ文化論』日本エディタースクール出版部、2001年を輪読し、そのあと、各自のテーマの提出したテーマに即してレポートを作成した。

テーマは、「スポーツとメディアの今後のあり方」「採点競技 - フィギュアスケートに対する批判を考える」「なぜドーピングをしてはいけないのか」。時間どおりに終わらないと、学生には次の授業が控えており、その点では、ゼミと少人数授業の中間といった感じだった。

教養ゼミ 内海和雄（火3・夏）

テーマ：オリンピックを考える

受講者：13名

昨年のアテネオリンピックの余熱が冷めやらぬ段階で本テーマを設定した。学生の英語力低下と討論力不足が問題にされていることから、Allen Guttmann, *The Olympics-A History of the Modern Games*, University of Illinois Press, 2002 をテキストに、章ごとにレポーター2名で分担し、2人の準備の上でレポートと討論の司会を行った。1、2年生を組み合わせるようにしたが、特に1年生はレポートの仕方を知らない人も若干いて、当初は討論もなかなか深まらなかったが、後半にはどうにか議論ができるようになった。

「単なる、スポーツ大会と思っていたオリンピックがいろいろな社会的関連を持っており、研究の対象となる意味が理解できた」という感想が多く、ゼミの使命は果たせたと思う。

教養ゼミ 上野卓郎（火2・夏）

テーマ：マルクス資本論

受講者：0名

マルクスを読むゼミで25年目にして初のゼロということで「歴史的」ではある。

教養ゼミ 坂なつこ（金4・夏）

テーマ：『抵抗の快樂』（フィスク）を読む

受講者：15名

ゼミという形式にもかかわらず、発言をする学生が極端に少なかった。積極的にゼミに参加するという姿勢がほとんどみられず、またこちらが発言を促しても反応が長続きせず、苦労した。教師の話はよく聞いているが、学生同士で議論をする、まとめるということに慣れていない印象を受けた。教養ゼミでのこのような反応は初めてだったので、発表の仕方やレジュメの書き方などに加え、ゼミ形式の授業の指導が必要であることを感じた。最後にレポートを提出し、レポート集としてまとめた。

（5）学部講義・ゼミ

商学部講義・スポーツ産業論 早川武彦（木3・冬）

受講者：113名

受講者は毎回ほぼ2/3位が出席していた。但し昼食後ということもあって眠っているものも散見されたが敢えて注意はしなかった。比較的関心が高かったようである。今回も外部講師をお願いした。講義が最後と言うことで色々な方をお願いしたかったが、4人に絞らざるを得なかった。テーマは、それぞれ「日米プロスポーツ・リーグ経営比較」「スポーツと町興し：サンフランシスコの場合」「スポーツと有料放送」「携帯サイトとスポーツ映像」などで受講者にとって非常に興味を引く内容だった。

社会学部講義・身体と教育 藤田和也（火1・夏）

受講者：35名（単位取得者24名）

社会学部講義・スポーツと社会過程（福祉とスポーツ） 内海和雄（火3・冬）

受講者：158名

単位修得116名、4年71名、3年86名、2年1名

「A：37（23%）」「B：40（25%）」「C：34（22%）」「D：5（3%）」「-：42（27%）」

登録だけの学生が約1/4もいる一方で、4年生で卒業が掛かっているからと「泣きついてきた学生」が何名かいた。授業中に出席は厳しく話していたのに、少し不快であった。と同時に来年度以降、いっそう明白に伝達する必要があることを痛感した。

3年生は就職活動に、4年生は決定先の呼び出し「研修」によって、欠席が多い。ともあれ、問題が多い。

社会学部講義・社会学部発展科目「スポーツ問題の社会学」 上野卓郎（火2・冬）

授業登録14（3年3、4年11）のうち4年9名は1回も出席せず、5名でのゼミ形式の授業をすすめた。法3年以外は社3、4年各2名。各自テーマに関して少なくとも3回の報告（1回20分）論点をめぐって討論。最終論文を2月7日に提出、16日に論集として編纂、製本。

論集の「はじめに」で編纂の意図を書いた。「この論集は、執筆した受講生が自他の論文を読み比べ、達成を確認し合うことはもちろんだが、執筆した受講生の了解を得て次年度の授業への資料とすることを目論んで編纂されている。」付録に「授業日誌」を加えた。論文題目は次の通り。「ヨーロッパ・プロサッカーの変容 ポスマン判決と現在への影響に対する考察」、「ドーピング問題と社会要因」、「メディアスポーツの歴史・現状とスポーツの構造変化」、「1930年代アメリカの移民コミュニティとスポーツ - 日系アメリカ人およびメキシコ系アメリカ人のコミュニティにおける野球の利用」、「障害者のスポーツの必要性和パラリンピックの抱える問題およびそれに対する私見」。

社会学部講義・身体社会史（大学院・学部の共修科目） 尾崎正峰（木2・冬）

受講者：13名（学部生）、4名（院生）

最初の2回を教師からスポーツと身体に関する歴史的視点、およびテーマの例示を行い、その後は受講生の個別のテーマに関する発表と討論という形式で進めた。

評価は、出席、個別発表、討論への参加、最終レポートの総合点で行った。

社会学部講義・スポーツ社会学の基礎 坂なつこ（月3・冬）

受講者：320名

とにかく、人数が多すぎた。本館改修中で教室も定まらず、学生にはかなり迷惑をかけた。授業はスポーツ社会学の理論を学史的に網羅したが、2年生から受講が可能な学部講義ということで2年生の受講生が多く、「社会学の基礎」を勉強していない学生に、「スポーツ社会科学の基礎」を教えるのは無理があった。次回からは授業構成に工夫をしたいと思う。

< 学部ゼミ >

商学部ゼミ 早川武彦（木5・6）

人数：7名

学部ゼミは今回4年生のみだったので、じっくり取り組めるはずだったが、3年生がいないことでなんとなく集中にかけたきらいがあった。こうしてみると3年生の存在は大きいと実感した。各自のテーマに沿って毎回議論を重ね、それを卒論に仕上げることにしたが、もっと文献を購読したり調査にとり組んだ方がよかったと反省している。卒論を各段階で論文としての基本的な形式が分かっておらず、引用や記述の仕方、自分の考えと参考にした論文や資料の区別がまったくできていなかった。これは一つには注意深く論文を読ませる経験を積ませなかったことにあると思われ、こうした反省が今回大きかった。

卒論発表会は例年のように公開で行った。今回は、岡本ゼミとの合同で賑やかさをまし、2日間に渡った。土、日にもかかわらず外部からも多数参加頂き、年々内容と発表の仕方に質的な高まりが感じられた。やはり外部の刺激は大きいことを痛感した。講評で「扱っている内容がどうも他人事で報告者の関わりがよく見えない。卒論のための卒論になっているように感じた。一橋大学生ならもっとできるはずだ、この程度で満足すべきではない」との指摘に当の4

年生は勿論岡本ゼミの3年生も身の引き締まる思いで受け止めていた。

商学部ゼミ 岡本純也(木5・6)

人数：4年生7名，3年生8名

夏学期には、広瀬一郎『新スポーツマーケティング』創文企画，2002年を、冬学期には近藤良享『スポーツ倫理の探求』大修館，2004年をテキストとして輪読形式ですすめていった。今年度は3・4年生を合わせると15人を超える大所帯となり、合同形式で進めていくとゼミ生一人ひとりの発言機会が少なくなり、学年別のゼミを行わなければならないということも感じた。しかし、ゼミとしての一体感の醸成ということを見ると、完全に分けてしまうということがよいのか、もう少し検討する余地があると考えている。

夏休みには沖縄県の宮古島での調査合宿を行った。体育会に所属する者が多い中、奇跡的にもほぼ全員が参加することになったが、3日のうち1日を台風でつぶされてしまった。しかし、短時間ではあったが、それぞれのゼミ生が自分のテーマの調査を行うことが出来、また、寝食をともにすることでゼミとしての一体感は養われたと思われる。調査テーマは以下の通り。

- 「宮古相撲の歴史と実態」
- 「宮古馬の競馬について」
- 「宮古島の伝統的なまつりと新しいまつり」
- 「宮古島とトライアスロン」
- 「プロ野球キャンプの地域への影響」
- 「伝統的地場産業としての泡盛業界の現状」
- 「ゴルフにおけるジュニア育成の実態」

4年生の卒論に関して、今年度、初めて早川ゼミと合同で卒論発表会を行った。多くの学外者が参加する中で発表を行い、この経験を通して4年生が大きく成長することが実感された。準備などに多大な労力を必要とするが、その教育的な意義を考えると、できることならば、来年度以降も継続して卒論発表会を実施していきたいと考えている。今年度は大学院生が中心になって非常にうまくマネジメントをしてくれた。また、3年生もプログラムの作成や当日の会の運営に積極的に協力してくれた。このノウハウが来年度以降に伝達され、活かされるように、長い時間をかけて準備をしていきたい。

社会学部ゼミ 藤田和也(月3・4)

講義テーマ：子どもの発達と社会 人数：1名

社会学部ゼミ 高津勝(木4・5)

人数：3年生3名、4年生7名(うち副ゼミ1名)

3年生は尾崎ゼミと合同で夏期に地域調査(札幌コンサドーレと日本ハム)。冬学期は報告書作成を中心に運営した。

4年生は卒論指導を中心に運営した。卒論のテーマは、以下のお通り。

「広島東洋カープ 市民球団としての役割」「地方競馬 何を目指して走り続ける」「インターネットを通じたメディアスポーツ」「中日ドラゴンズは『日本一』になれないのか」

社会学部ゼミ 内海和雄（月5・6）

講義テーマ：スポーツ社会学を学ぶ 人数：2名

何とか無事に卒論執筆にこぎ着けた。2月18日に院生、教員も入れた論文発表会を開催する。

社会学部ゼミ 上野卓郎

昨年に続いて受講生ゼロ。

社会学部ゼミ 尾崎正峰（木4・5）

人数：2名

夏学期の最初は、3、4生合同のゼミで、テキストの輪読、個別の問題関心に関する発表を行った。

3年ゼミは、夏学期の後半、および冬学期にかけて、高津ゼミと共同で地域調査を実施した。ゼミは、そのための準備と調査結果の報告書作りに充てられた。

4年ゼミは、卒論作成へ向けての討論が中心であった。

（6）大学院講義・ゼミ

大学院講義 早川武彦（木2・冬）

講義テーマ：メディアスポーツ論 人数：5名

久しぶりに他研究科からの参加があり多面的なテーマで論議ができた。基本文献を読むのではなく、各国のスポーツ・メディア状況を知ることが重点に、中国、アメリカ、スペイン、フランス、イギリスなどのアップデートな情報をwebサイトからもちより論議した。

大学院講義 岡本純也（木2・夏）

講義テーマ：スポーツ・イベント論 人数：博士1名 修士4名

メディアからはヨーロッパ、アメリカなどのごく限られた国のスポーツの情報は入ってくるが、他の多くの国の事情については情報が乏しい。そこで非英語圏の中国、ブラジル、ドイツなどのスポーツ産業事情をそれぞれの院生が報告しあい、日本との比較や他の国との比較を行いながらディスカッションした。

大学院講義 藤田和也（火2・夏）

講義テーマ：教育保健論「子どもの健康・発達問題と現代学校の機能」 人数：6名

大学院講義 高津勝（木3・冬）

講義テーマ：地域スポーツ論 人数：M3名。

グッドマンのスポーツ論を検討した。

大学院講義 上野卓郎（火4・夏）

講義テーマ：国際スポーツ論 人数：M1年2名。

キーズ博士論文『スポーツの独裁』（英文）の輪読。テーマは「スポーツとナショナリズム」。輪読を通して院生2人の知識の状況が分かり、お互いにそれを意識したやり取りもあり、面白かった。

大学院講義 尾崎正峰（木2・冬）

講義テーマ：身体社会史（大学院・学部の共修科目） 人数：13名（学部生）、4名（院生）
内容については、上記の「学部講義」を参照。

大学院ゼミ 早川武彦（木1・冬）

人数：6名

各自の研究テーマを報告し相互の関心を高めると同時に問題指摘や研究方法、資料検索方法など共有でき、それぞれが自分の問題を整理する機会となった。

大学院ゼミ 藤田和也（火3）

講義テーマ：教育保健研究の方法 人数：5名

大学院ゼミ 高津勝（木2） 人数：2名。修士課程1名、博士課程1名。

論文指導を中心に運営した。

大学院ゼミ 内海和雄（火2）

講義テーマ：スポーツ社会学の検討 人数：3名

大学院ゼミ 上野卓郎（木4・水2）

人数：1名（M）、1名（D）

昨年に続いてD論とM論の指導ゼミを別々に行った。D論ゼミでは当該院生が6月末に論文（題目「スペイン内戦とコミンテルン、ソ連」）を提出したので、定期的なゼミは終え、主ゼミ加藤教授とD論審査の協議を進めた。審査会を10月5日に行い、11月研究科委員会で合格、11月29日学位授与に立ち会った。これで5年に亘ったD論ゼミは完了。

M論ゼミはほぼ毎週、時に隔週、週に2回のペースで当該院生の論文テーマ「技術の高度化と『問題』の考察 女子体操競技の社会学的研究」の報告を検討した。6、9月のリサーチワークショップをステップに、論文構成と枠組みの論理を吟味し、執筆への追い込みをかけた。生活面の困難にも若干の援助をし、12月から1月初めの本格的執筆で何とか完成。製本前に論文を見ることができなかったが、2月のリサーチワークショップに向けて2月2日にサブゼミの尾崎教授と「合同ゼミ」を初めて開き、論文講評と発表レジュメの検討を行うことができた。この院生は4月から企業に就職。

今年で一区切りがついた感じ。D論指導委員となっている院生の論文が一つ残っているだけ、来年度は社会人MCの「指導」という初めての経験が待っている。

大学院ゼミ 尾崎正峰（水2）

人数：2名

テキストの輪読と個別のテーマに関する発表を2つの柱として進めた。

3. 教育条件の整備・拡充

(1) 施設・設備

以下は、本年度当初に整備・拡充が必要とされていた事項とその実現状況を示したものである。残念ながら、本年度も昨年度と同様にその実現状況は芳しくない。

（×印は変化なし）

新体育館・プールの建設 本学の概算要求事項に「現体育館の改修」として載せられた。

現体育館の整備（ が実現されるまで）

- ・日常的なメンテナンス 作業員の坂口さんによる整備は十分に得られた。
- ・新部室建設による日陰対策（＝館内照明の改善） ×
切れた電球の取替については即座に対応してもらえず、本年度より施設課に修繕依頼窓口ができたが、今後の速やかな対応が望まれる。
- ・窓ガラスの補強・強度化 ×
- ・男女更衣室の整備（壁の塗装、湯沸かし器取替、洗面所の増設・更衣棚取替、シャワーのカーテンの取替） 女子更衣室の湯沸かし器の取替、換気扇の増設のみが実現。

新体育館予定地の用途変更

- ・多目的グラウンドの設置（整地、フェンス取付など） ×
それどころか、ゴミ置き場がさらに拡張され、運動文化科の要求では、体育館建設予定地であるところに別用途で使用されるかたちで、既成の事実化が進行している事態は憂慮される。

テニスコート（クレイ、オムニ）

- ・クレイコートのオムニ化 ×
- ・オムニコートの人工芝の張り替え ×
- ・クレイコートとオムニコート間の緩衝地帯への芝生植え（水はけが悪く、ローラーかけもできない部分） ×
- ・オムニコートの日除けの設置 ×

バレーボールコート

- ・バレーボールコート専用の倉庫の設置 ×
- ・体育館による日陰部分の対策 ×
- ・グラウンド面のオムニ化と水はけ対策 ×

（但し、オムニ化は2003年度以降は要求していない。）

なお、年度末の整備では、クレイコートのネットの支柱が規定の高さよりも低いためその是正とラインテープの取替、溝の水はけ改善などがなされる予定である。

陸上競技場

- ・トラックのタータン化 ×
- ・(タータン化実現までの)水はけ対策 第三種公認を得るために大学はトラックを整備

中である。ただし、水はけがどの程度改善されるかはわからない。

- ・フィールドの整地と芝生の整備 ×

運動文化科の予算で 3.5 m³ほどの土を購入して捲いたが十分な補修にはならなかった。

なお、年度末、学生支援課に第三種公認のための整備時に凸凹に土を捲いてくれるよう依頼し、多少の整備がなされる予定となった。

また、7月と9月には業者による草刈りがなされた。例年では6月に1回目がなされるところ、7月にずれ込んだため、授業に若干の支障がでた。

野球場

- ・フェンス沿いの草刈り 実施された。

- ・外野部分の芝地の整備 ×

西キャンパスの男女更衣室の管理

- ・授業に支障のないような維持管理 清掃はなされたが、部活による利用が常態化して、スペースが手狭になっている。

- ・トレーニング室の整備 ×

整備というよりも、手狭なことが最大の問題と言えるので、本格的なトレーニング室の確保を目標にする必要がある。

教材・教室利用設備の改善

- ・雨天時の教室の確保 一応何とか確保できた。

- ・AV設備の整備・改善 目立った改善はなかったが、一応の利用は可能であった。

ただ、AV操作に不慣れな場合の補助が必要なこと、マイク等のAV機器を教室に常備することなどが要望事項として上がっている。

- ・参考文献、参考ソフトなどの充実 ビデオ教材、ルールブック等の若干の補充ができた。

以上のうち、新体育館・プールの建設については、昨年度末(2005年2月17日)の学長・教育担当副学長との会合をもち、状況説明と要望を出したこともあって、本年度の本学の概算要求事項に再び載せられた。これによって建設への見通しがついたというわけではないが、将来に向けての足がかりができたので、わずかながらの前進ではあった。今後、この必要性を説得的に訴えていくためには、他大学と比較しても本学の体育施設が貧弱であることが明らかにわかるようなデータ収集をする必要がある。

その他の点については上記の通りであるが、依然として改善状況は芳しくない。なお、授業担当者からの指摘や要望としては、次の点があった。

- ・テニスコート：溝の泥溜まり(雨天後はボールが泥だらけになる)の改善、日よけの増設、コートブラシの破損、落葉期の落ち葉処理
- ・陸上のフィールド：サッカーの授業用としては凸凹が多い。夏季の草刈りを早めに(ドリブルやシュートのテストに支障が生じた)
- ・野球場：ベンチの設置(夏は必須) 外野部分の凸凹の改善

以上の状況を考えると、次年度からは、優先順位を決めて重点的な要望を事務当局に切実に働きかける必要がある。

(2) 運動文化施設管理要員

1年ごとの入札方式によるも、昨年度に引き続き同一の方が作業員として従事された。そのため、業務内容の継続は滞ることなくなされ、現状が十分に維持された。業務内容は、体育館、テニスコート、バレーボールコート、ゴルフ練習場の整備と清掃、陸上グラウンドとホッケー場に付属する倉庫とその周辺の整備などであるが、全体として作業員の精力的な作業によってかなり良好な条件が維持された。また、作業員の協力的な姿勢のおかげで、上記の作業範囲を超えた臨時的な作業にも応じてくれている。また、勤務時間も、契約の時間帯よりも早朝2時間あまり早く着手され、1時限の授業が支障なく実施できる状態が維持されていることも特記しておく。勤務時間帯については事務当局と調整中であったが、改善された。

(3) 用具・教材

授業用の教材・教具の購入は、本年度については例年並みに(教材ビデオ、ルールブック等のテキスト類を)補充できたが、野球場のベンチの設置、テニスコートの日除けの取り付けなどの要望が出ている。また、施設整備の面では、陸上競技場のフィールドの整地、体育館の照度を上げるための照明の改善、切れた電球の速やかな取替などの要望も出ている。これらへの機敏な対応を引き続き事務当局に要望していく必要がある。なお、昨年度、要整備事項としてあげた東キャンパス正門付近へ教室指示や休講通知などの掲示手段の設置が、設置要求を具体化していないので、次年度には落とさないようにしたい。

(藤田 和也)

・教育部活動

1. 実践交流会

(1) スポーツ方法 における「シラバス」の実践報告および検討

(2005年5月17日教育部提案)

夏学期に唐突に導入された「シラバス作成」であったが(非常勤講師の場合は任意提出)、冬学期からは非常勤にも義務化されることを考慮し、第1回実践交流会では、体育実技におけるシラバスとはどのようなものか、また従来の到達点、成果などをふまえつつ、スポーツ方法におけるシラバスとはどのようなものにすべきかについて議論した。

「シラバスは授業を改善するか」(小林勝法、奈良雅之、鈴木明、1997年『一般教育学会誌』)によれば、シラバスとは、アメリカの大学において誕生、発展したものであり、その後日本にも導入され平成4年には80校だったものが、平成6年176校、平成7年281校と、実施している大学の数は急激に増加している。ここでは、従来学生に提示する授業に関する情報としての「講義要綱」とは、学生が履修選択の参考とするものとされ、「シラバス」とは、毎回の授業で使用されうるものとしており、必要項目として各回の授業のテーマ、予習、課題等のための

参考文献など、評価の方法と基準が示されなければならないとしている。実践交流会では、資料として、名古屋大学、立命館大学など先行して実施している他大学の例を、インターネットで公開しているものを参照し、資料とした。しかしながら、多くの大学においてその方式は異なっており、また、通常シラバスとは授業で配布するより詳しい資料と考えられるため、ネット上に掲示されているものには従来の「講義要綱」との混乱がみられた。

そこで、名古屋大学高等教育研究センターがつくっている、「成長するティップス先生 Ver1.2 - 名古屋大学版ティーチングティップス - 」(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>)を参考とした。それによると、さまざまな授業に関する問題について Q&A 形式で解説されているが、それによると「クラス」を通常の 90 分の授業、「コース」を 1 つの学期にわたって展開される、いわゆる「科目」を意味するとしている。そのため、一学期の授業を構築するために、コース・デザイン（コースの内容をつくること）が必要とされ、そこにおいて 1 つの学期を通じて担当する科目の全体像（到達目標、おおよその内容、授業の方法、評価の方法）などを設計することになる。すなわち、シラバスとは、それらの全体像を学生に提示し、「学習の手引き」とするためのものといえる。また、対して講義要綱とは、先述したように、「履修の手引き」とされる。すなわち、シラバスとはコース・デザインをどのように作成するかが先行しており、また、そのコースがどのようにカリキュラムの全体に位置づけられるかというカリキュラム・デザインが重要となるのである。そこにおいて講義要綱とシラバスの違いを明確に区別する必要がある。

以上の報告をふまえ、さらに、夏学期初回オリエンテーション時に配布した各自のシラバスをコピーしたものを資料として回覧しつつ、議論を行った。前述の例と同様に要綱をそのまま配布している場合もあり、認識の違いがあった。

また、具体的事例として、岡本担当のスポーツフィットネス、尾崎担当のテニスの授業で行っているオリエンテーションとシラバス、また授業の進めを例に報告がなされた。

今回のシラバス導入に関しては、第一に、上述したカリキュラム・デザインが欠落しているという点が指摘される。しかしながら、運動文化については従来から実践交流会などにおける教育実践の積み重ねがあり、Faculty Development といえる蓄積があり、「一橋大学の体育授業像」は発展的に継承されてきたといえる。その意味では各自にコース・デザインは一任されているといえる。しかしながら、今後大学の全学共通教育改革が進展中であり、カリキュラム・デザインという全体像からシラバスの活用を考えることが必要であろう。

議論では、シラバスそれ自体の形式、問題点などが指摘された。第一には、シラバスが教員の授業内容や成績評価等の「説明責任」を示すという利点があり、知識、技能の「伝達型」授業には適している一方で、固定的になりやすく、「双方型」、「学生の学び重視型」の授業においては、授業内容が変更しにくいという指摘がなされた。クラスが始まるまで、経験者や初心者の割合、個々人のレベルなどが不明である場合、練習内容や年間スケジュールなどはフレキシブルに対応させることが必要となってくる。しかしながら、このことは体育実技に限定的なことではなく、「対話型授業」を目指す場合にも、シラバス導入を目指す学生への科目選択、学修計画への助けとなるように、シラバスを活用できる方向で内容を検討すべきであろう。具体的には、初回のオリエンテーションを丁寧に行う必要があることが確認された。

（坂 なつこ）

(2) 私のささやかな授業：本学実技科目30年の取り組み (2005年7月19日早川武彦)

・はじめに

本学に奉職して30年、一日一日が苦闘の連続でしたが、様々な大学(カリキュラム)改革をもにらみながら日々の実践で精一杯取り組むことが使命と考え、先輩・同僚、非常勤そして助手の方々に学び、支えられながら今日まで長らえてきた。このことにまずは感謝しておきたい。

実技種目では、テニス、卓球、バドミントン、水泳(シーズンコースも)、バレー、バスケ、ソフト、サッカーなどを扱い、教材研究にかなり時間を費やした。この多種目に関わることによって運動文化で教え・学ぶ共通の内容(技術構造、戦術・戦略、身体操作、文化史)を考える契機にもなった。またグループ学習方式による学生らの人間関係や学習プロセスなどにも重要な教育・学習内容が存在していることに気づき始めた。グループノートへのコメントの書き込みは正直随分エネルギーが割かれた。技術や動作そしてグループ内の人間関係、活動の活性化などのメッセージを文字や文章で指摘することが辛かった。これはポイントを鮮明にし、的確に表現する能力が問われたからである。これらは、実践交流会や個人的な相談などからヒントを得たが、同時に学生からも多くを学んだ。

学生から学んだ大きなことは「授業を愉しむ」ということである。駆け出しの頃は必死で教育する=教えることがすべてだと考えていた。基礎技術や技術の発展系を学んでもらうことが授業の主要な課題であると考え、それを半ば学生に強要していた。おそらく面白くない授業だったに違いない。ただ、学生と年齢がそれほど違わなかっただけに、“篤さ・情熱”に救われてなんとか過ごしてきた思いである。

十数年が過ぎ、教えた学生と教授会で顔をあわせた瞬間、血が引いた。立場が逆転した瞬間でもある。小平での授業をどう評価していたのだろうか。体育科への厳しい眼差しが常に向けられている状況で「あんな授業なら・・・」と思われなくなかった。授業で精一杯取り組んできたことを誇りにしつつも、未だにこの点だけは聞き出すことができないているが、いやな顔もせず、笑顔で挨拶できることで、気を落ち着けている。情けないというべきか・・・？

以下では30年間に培った自分の授業について、授業イメージ(観・目的)、授業準備そして授業展開の項目にまとめてみたい。

・授業観・イメージ・目的

「運動文化の面白さが分かる 伝える」能力を開花する

- * 面白さ：技術・知識・仲間(人間関係)・自分(心身の刺激)の諸関係が分かる
- * 教材を知り/で知る

・教育準備

1. 授業方法の検討 (具体的には何を学んでもらうか):

スポーツ(教材)の技術/構造/歴史(*用具・器材の変化で技術構成や質も変化することを学ぶ)

スポーツ学習の方法

仲間の存在

自己満足（楽しさ経験と身体刺激）

2. 教材分析（どんな準備をしたか）:

1) 教材研究：技術構造分析 ゲーム構成技術分析

ゲーム変化・発展史分析

この技術分析には用具と身体・運動の関係が含まれる。特に用具の材質の変化が技術性を変化させ、操作上で変化が生ずることにも注目する。

2) 学習方法研究

グループ学習方法：

リーダー依存型：リーダーの指導下で計画立案・実践・まとめ

リーダー経験型：誰もが計画立案・実践・まとめ

. 授業展開

1. オリエンテーションにて授業の全体像を提示（パワーポイントにて）

学習内容・練習計画（案）の提示

グループ学習とその手続き：計画立案・実施・まとめ

2. グループノートによる検証

. 今になって思うこと：つれづれに

謝辞をはじめにのべたのでここでは反省点として：

- ・ 時間に流され、時々の課題をしっかりと解決しなかったこと。
例えば、折角手がけた技術練習体系をさらに実践的に深めること。
学生の授業への要望や意見を次年度に活かす努力が不足していたこと
- ・ 学習内容や教材分析に関わり、その概念や用語を深く検討しなかったこと。
例えば、「技術系統」「用具・施設」「授業内容」「スポーツ権」「スポーツ史」etc.
- ・ 計画や授業展開が、時に教条的で、学習者の意向をしっかりとくみ取れなかったこと。
例えば、最終レポートに寄せられた授業への意見・要望には途中でグループ替え、
や個別の指導要求が上げられていた。
余りにも「技術学習」に拘りすぎ、彼らが立てた計画に大幅な修正を強要したこと。
- ・ グループノートへの書き込みやチェックに甘さが目立ったこと。
例えば、ノート提出しなかったグループや責任者に対して十分な指導ができなかったこと。
ノートに目を通すことが時にお座なりになってしまったこと。結果として計画が形骸化し、結果の反省がいい加減でも黙認してしまったこと。
- ・ そしてなによりも授業の趣旨・目的が十分学生に伝えることができたかどうかの短期的な検証をし得なかったこと。

(3) スポーツ科学・健康科学科目の検討に向けて(2005年12月20日高津勝、教育部提案)

スポーツ・健康科学の授業の体系化の検討にむけて(学生への履修ガイドとして)、2004年度方針(「これまで十分に議論されてこなかった、スポーツ科学・健康科学の科目構成や内容の検討を行い、体系的なカリキュラムづくりを目指す」44頁)をうけて、第3回実践報告会では、過去の議論の経過と、現在のカリキュラム設置の際の議論の整理、他大学など、近年の動向について報告した。

過去の議論の経過

体育エリアと講義構想～歴史的回顧(報告:高津勝)

(1)新制大学の発足とともに保健体育の実技と講義が「一般教育科目等」に位置づけられ、実施されてきたが、1980年代半ばに学内で新学部(国際人文学部)の設立に関する議論が起こり、体育エリアは「大講座:運動文化」を構想してこの論議に加わった。「新学部設立準備委員会答申」(1984年3月14日)のなかに下記の記載がある。

大講座:運動文化研究

教育科目名:運動文化論、運動文化史、スポーツ機構、スポーツ運動、運動技術論、等。

(2)1990年代初頭、新学部構想の再編論議が起こり、体育エリアは次のような講座編成で臨んだ(「エリア会議資料1991・03・05 Kozu」による)。

大講座:スポ・ツ文化(案)

スポ・ツ文化史/スポ・ツ文化論/生涯スポ・ツ論/スポ・ツ環境論/
比較スポ・ツ文化論/スポ・ツ文化交流論/国際スポ・ツ組織論

なお、上記の講座と教育科目の編成は、次のような「スポ・ツ科学の体系とスポ・ツ政策学」の構想をベースにしていた。

	健康社会論
	・
スポ・ツ史	健康環境論
・	・
・	・
* スポ・ツ文化論(社会学)	健康行動論
・	・
・	・
* スポ・ツ技術論	スポ・ツ技術学
・	・(狭義のスポ・ツ科学)・
・	・身体運動学
	・(運動と発達)

* スポ - ツ組織論	・ (スポ - ツ運動学)	・
・	・ (戦術・戦略論)	・ 身体運動学
・	・ (用具・施設学)	・ (出力と制御)
* スポ - ツ政策・計画論	・ (トレ - ニング学)	・
・	・ (コ - チング学)	・
・	・ (スポ - ツ心理学)	・ 心理学
比較スポ - ツ論	・ (スポ - ツ医学)	・ 医学
・	・	・
国際スポ - ツ (関係) 論	・ . . スポ - ツ環境論	

法学 / 経済学 / 経営学・商品学 / 社会学 / 社会政策・計画学 /
 教育学 / 環境論 / 余暇論 / 情報論 / 建築学 / 美学・芸術 / 数理・統計学 /

(3) 1990 年代半ば、文部省の大学政策との関連で新学部の設定に見通しが不明なことが判明し、新たに、学部基礎を置かない「独立大学院」によって従来からの懸案に対応することになった。体育エリアでは2つの研究科に所属し、下記の教育科目を編成することにした(1994年1月24日の体育科会議の合意事項「独立大学院への希望、調整」、参照)。

- ・ 人文科学研究科：スポーツ文化論
 (スポーツ文化史、スポーツ政策、スポーツ運動論、比較スポーツ論)
- ・ 環境情報学研究科：スポーツ環境論
 (スポーツ環境生成論、運動文化・技術論、スポーツ計画論)
- 環境情報学研究科：人間環境学
 (保健環境論)

(4) 1990 年代半ば、「独立大学院」構想と関連して、教養教育および一般教育科目(等を含む)の再編が議論され、副専攻型の履修制度が構想された。いわゆる前期エリアも副専攻制度を採用し、4年一貫教育を実施しようとして構想したのである。その内容は、体育科「四年一貫教育(保健・運動文化)カリキュラム改革案」(1994年7月4日)を参照されたい。

(5) 1997 年に開設された運動文化発展科目の講義科目は、(4) をベースにして成立したのである。

(高津 勝)

教育部提案では、この部分を担当し、近年新設されたスポーツ関連の学部、学科のカリキュラム、科目構成などの資料を提示することで今後の参考と近年の動向の把握とした。

従来は、体育学部、体育学科などの専門的領域で展開されていた体育・スポーツであるが、最近の傾向として、生涯学習や福祉、観光、マネジメントなど広範囲の領域あるいは複合領域にまたがって展開されつつあることがわかった。また、科目構成などについても、それらを反

映させた複合的なものであった。

今回は、私立大学を中心とした参考資料の提示にとどまったので、次回は国立大学法人で本学と規模が近いところの資料を収集するべきであるという指摘がなされた。

【当日のレジュメ】(教育部提案)

テーマ：運動文化科目の検討にむけて(学生ガイド作成にむけて)

(2004年度『われわれ』方針「これまで十分に議論されてこなかった、スポーツ科学・健康科学の科目構成や内容の検討を行い、体系的なカリキュラムづくりを目指す」44頁)

- ・大学における、スポーツ研究・教育の動向 - 新設学部、学科など

「スポーツ人気」

近年の傾向：「ライフデザイン」「生涯スポーツ」などのかかわりで。スポーツビジネス。

(体育大学、体育学部など選手、コーチ、トレーナーなどだけではなく)様々な領域と結びつき、健康、福祉、地域、観光(レジャー)、ビジネス(マネジメント)

*総合大学のなかでのスポーツ、健康へのアプローチが、学生にも魅力的

- ・非常勤の削減、常勤の不補充等。どのようにカリキュラムを維持、充実させるか。

- ・学生向け、履修モデル作成

実技、講義科目、(共通教育、学部、大学院)

*「平成18年度 学士課程 学修計画ガイドブック」

*「平成18年度 学士課程 履修ルールブック」

- ・各大学の例

早稲田大 スポーツ科学部 「学びの体系」 *大学院(06.4)

東洋大 ライフデザイン学部(06.4月) 健康スポーツ学科(朝霞キャンパス)

*社会学部(スポーツ社会学ゼミ担当教員、一名)

大東文化大 スポーツ・健康科学部(06.4月?)

*履修・カリキュラム、モデル

順天堂大 スポーツ健康科学部(スポーツ科学科、*スポーツマネジメント学科、健康学科)

*カリキュラム・履修の流れ

城西国際大 観光学部 ウェルネスツーリズム学科(06.4)

東海大 体育学部 - 生涯スポーツ学科、スポーツ・レジャーマネジメント学科

明治大、専修大

(坂 なつこ)

2. 教育活動日誌

- 2005/04/05 教育部会 (新年度顔合わせ会打ち合わせ、実践交流会)
新年度顔合わせ会
- 04/26 教育部会 (スポーツ方法 〃 の履修者状況、今年度予算執行計画作成、実践交流会)
- 05/17 実践交流会(スポーツ方法 における「シラバス」の実施報告及び検討：教育部)
- 06/14 教育部会 (施設関係、夏学期試験方法、授業評価アンケート実施、実践交流会について)
- 07/13 教育部会 (方法 アンケート調査、成績提出、実践交流会内容変更)
- 07/19 実践交流会(私のささやかな授業～本学実技科目 30年の取り組み～：早川武彦)
- 08/01 教育部会 (カリキュラムについて、来年度カリキュラム(案)、教育プロジェクトの募集)
- 09/29 教育部会 (来年度カリキュラム、実践交流会、施設条件)
- 11/01 教育部会 (来年度カリキュラム、実践交流会)
- 12/05 課外活動との施設利用調整会議
- 12/20 教育部会 (「スポーツ方法アンケート」について、体育館施設管理業務委託について、来年度「学修計画のために」について)
実践交流会(スポーツ科学・健康科学の検討に向けて：教育部、高津勝)
- 2006/01/25 教育部会 (来年度「学修計画ガイド」「履修ルールブック」について、「スポーツ方法アンケート」、教員へのアンケート、成績提出について、総括と方針、予算関係)
- 02/21 教育活動の総括
- 02/28 教育部会 (教育活動の方針)
- 03/06 教育活動の方針
- 03/15 教育部会 (教育活動の総括と方針)

3. 調査活動

例年同様、2005年度もスポーツ方法の受講者に対して、われわれ独自のアンケートを実施した。スポーツ方法 は冬学期末、スポーツ方法 については夏・冬の学期末に行った。様式はこの数年間使用している質問項目と、2004年度まで全学共通の「授業評価アンケート」に組み入れていた5つの質問項目(スポーツ方法の目的に関する質問)からなる(巻末資料参照)。このアンケートは、われわれ運動文化科のカリキュラム編成の改善に役立てるとともに、授業担当者個人に結果を還元することによって授業改善に役立てている。

1. スポーツ方法に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法 の受講生
- ・実施期間：2006年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：857人(登録者1057人)

(1) 満足度

本年度(2005年度)は、昨年度(2004年度)に比べ「大変満足」が7.5%減少し(35.8% 28.3%)、「まあ満足」は2.7%上昇し(43.1% 45.8%)増加している。合わせると74.1%となり、昨年度(78.9%)に比べると4.8%満足度が減少していることになるが、これは一昨年度(2003年度)とほぼ同様のレベルになっている。一方、「やや不満」の3.4%と「大変不満」の1.2%を合わせた値、すなわちなんらかの「不満」を訴えている者の割合は4.6%と、調査開始からの最低値であった昨年度(4.3%)に比べて微増するという結果となった。総じて、昨年度に比べると「満足度」が減少し、「不満度」は微増するという結果になっているが、大きな変化があったとはみなせないであろう。さらに付け加えるならば、「やや不満」(29人)「大変不満」(10人)と答えている者の分布は、特定の種目に集中することなく分散しており、このことより、スポーツ方法 という科目全体として不満を訴える者は少なく、例年通り質の高い授業が行われているということができよう。

種目別にみると、「大変満足」と答えている者の割合が多いのは、フラッグフットボール(37.5%)、剣道(35.3%)、フライングディスク(34.5%)、サッカー(32%)、硬式テニス(32%)である。「大変満足」と「まあ満足」を合わせると、フライングディスク(82.8%)、フラッグフットボール(87.5%)、バスケットボール(82%)が80%を超える受講者の「満足」という回答を獲得している。では、具体的に受講生はどのような点に「満足」「不満足」を感じているのであろうか。自由記述にみられる「満足した点」「不満足な点」についてみていこう。

「満足した点」として一番多く表明されている意見は「仲間ができた」「友達が多くできた」というものである。また、「先生が丁寧に教えてくれる」「先生がいい人だった」「先生がやさしい」といった教員とのコミュニケーションに関する意見も多く表明されている。この結果からは、現在の大学生が友人や教員とのコミュニケーションを求めており、スポーツ方法の授業が、彼ら・彼女らのそのような欲求を満たす場として機能しているということが読み取れる。しかしながら、「不満な点」として「班以外の人と仲良くなれなかった」などの意見も出されており、グループの作り方やグループ間の交流などはグループでの学習の課題とされるであろう。

また、「満足した点」として「自由にできた」「自分たちで自由に練習が考えられた」「試合が多くできた」「ゲームが多かった」という意見も多くみられ、このことは受講生が教師側の働きかけによる強制や拘束を嫌う傾向にあるということを表しているであろう。それは「不満な点」として「レポートを課すこと」「グループノートを課すこと」などが多くあげられていることからみてもとれる。理想としては、受講生が「強制されている」という感覚を持たずに、教員が(授業目標に向かわせるために)働きかける方向へと、自然に学習が進められていくことなのであろうが、そうならない場合、なぜレポートやグループノートを課すのか、十分な説明がなされなければならないであろう。さらに、あまりに自由にすると、「もう少し技術を指導して欲しかった」という意見が出されることにもなるので、「自由」と「働きかけ(方向付け)」の案配は非常に難しい点である。

「不満な点」として一番多い意見は、例年どおり、1限に開講することへの不満である。これは課外活動との関係で午後の開講が制限されている現在においては致し方ない課題である。そのような実情を十分に受講生に対して説明していくことも必要であろう。また、同様

に、通年で「2単位」であることに対する「不満」も多く表明されているが、これに関しても実技種目がなぜ「2単位」であるかについて説明していくことが必要だと考えられる。

(2) 方法 の履修希望に関して

スポーツ方法 の受講者でスポーツ方法 の履修を希望する者の割合は例年と同様の傾向を示している。「ぜひ履修したい」と答えている者も例年10%前後であるが、今年は11.6%を獲得している。「時間があえば」27.3%、「やりたい種目があれば」14.3%と合わせると、50%を超える者がスポーツ方法 の履修希望を表明していることになる。今年度のスポーツ方法 の履修者数をみると2年生の受講者（昨年度のスポーツ方法 受講者）が197名となっており、まだまだ方法 の受講者は増やせるであろうことが理解できる。満足度別に履修希望者の割合（「是非履修したい」+「時間帯あえば」+「やりたい種目があれば」）をみると、「大変満足」と答えた者の中で63.5% 「まあ満足」53.9% 「ふつう」40.8%と、満足度が低くなるにつれて履修希望も減少する。「やや不満」「大変不満」と答えた者における履修希望者の割合は低いのかということそうではなく、それぞれ39.3%、40%と比較的多くの者が履修希望を表明している。

(3) 方法 の非履修の理由に関して

スポーツ方法 を「履修しない」と答えた受講生は32.3%であり、これは昨年度とほぼ同数である（2004年度：32%）。履修を希望しない理由の傾向もほぼ例年通りである。「方法 の履修非希望の理由」（複数回答）でもっとも多い答えは「単位数が少ない」57.3%（昨年度は60.2%）、「ほかの科目を優先」46.1%（同41.3%）である。

(4) スポーツ方法の目的達成に関して

スポーツ方法 の目的は「()基礎的な体力の養成」と「()スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得など)の養成」「()グループを通しての人間関係の形成」である。2005年度より、「スポーツ方法に関するアンケート」の中に、履修した授業において、これらのスポーツ方法 の目的が達成されたかどうかを問う質問項目を設けた。

第1点目の「基礎的な体力の養成」に関してスポーツ方法 の授業が「体力の維持・向上」に役だったと答えている者は59.2%（「大変そう思う」10.6%、「そう思う」48.6%）にものぼる。週に1度の運動によって彼ら・彼女らの体力が実際に維持・向上しているかについては疑問が残る点ではあるが、スポーツ方法 の授業が彼ら・彼女らの運動欲求を充足させるための貴重な時間になっているということは事実であろう。第2点目の「スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力の養成」に関して、「技術・方法の認識の深まり」「技術・技能の向上」については、それぞれ69.5%、63.7%の者が肯定している。また、第3点目の「グループを通しての人間関係の形成」に関しては、「仲間ができたか」という質問に対して78.3%の者が「大変そう思う」「そう思う」と回答している。

われわれはこれらの3つの目的が達成されることによって「スポーツを（履修した種目を）楽しむことができる」という、スポーツ方法 の目的が達成されると考えているが、「スポーツを（受講したスポーツ種目を）楽しむことができるようになったか」という問いに対して、79.6%

の者が「大変そう思う」「そう思う」と答えていることをみると、スポーツ方法 の授業ではこの目的に合致する教育の方法がとられ、その成果が表れていると評価できるであろう。

(5) スポーツ方法の授業に対する要望・意見

「満足した点」「不満な点」については既述したが、「希望」についても例年と同様に「単位増」への要望、「二限以降の開講」などが非常に多く表出されている。また、施設・設備に関する要望も、例年どおり屋外バレーボールに関する意見が多くみられた。バレーボールは室内で行うものという固定観念が、不満となって現れていると考えられるが、新体育館、もしくは屋根付きの教場を実現し、これらの不満を何とか軽減したいものである。それ以外の屋外種目に関しても雨天時の代替授業への不満は、多くは設備（屋内体育館・施設の不備、教室の確保、AV 機器、ビデオ教材等）への不満となっており、体育施設の整備、AV 機材、資料等の整備は不可欠であるといえよう。

2. スポーツ方法 に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法 の受講生
- ・実施期間： 夏学期 2005 年 7 月、冬学期 2006 年 1 月の各授業時間内
- ・有効回答数：327 人（登録者数：537 人）

(1) 満足度

スポーツ方法 においても例年同様にアンケート調査を実施した(巻末資料参照)。回答者の男女比は男子 76.7% (2004 年度：82.1%)、女子 23.3% (2004 年度：17.9%) と圧倒的に男子が多いが昨年度と比較すると女子の割合が増えている。また、学年別の比率は 1 年 - 1.2% (2004 年度：2.1%)、2 年 - 41.6% (2004 年度：27.4%)、3 年 - 28.4% (2004 年度：30%)、4 年 - 27.5% (2004 年度：40.3%) であり、昨年度との比較では 2 年生と 4 年生の比率が逆転している。受講経験については、1 回目（初めて）の受講 - 54.7%、2 回目の受講 - 24.2%、3 回目の受講 - 9.0%、4 回目の受講 5.9%、5 回目以上の受講 - 6.2% と、回数が増えるにつれて減少していく傾向にあるが、半数近くの者が反復履修者であることが分かる。

スポーツ方法 の満足度は、例年高い数値を示しているが、2005 年度も「たいへん満足」52.9% (2004 年度：51.3% , 2003 年度 61.7%)、「まあ満足」39.9% (2004 年度：39.8% , 2003 年度 32.9%) と、9 割以上が満足（「やや不満」0.7%、「大変不満」0.3%）と答えている。

(2) 履修理由

一昨年度(2003 年度)の冬学期より、方法 の受講理由(複数回答)を項目別に選択してもらっている。今年度に最も多かったのは「健康・体力を維持・向上するため」61.5% (2004 年度：59.8% , 2003 年度冬学期 51.2%) であり、次に「実施する種目が好きだ(やってみたかった)から」で 50.5% (2004 年度：58.6% , 2003 年度：82.7%) となっている。また、「親しい仲間をつくる」は 12.6% (2004 年度：11.5% , 2003 年度：22.8%) と昨年と同様な傾向となっている。種目への愛着や友人との交流を好む傾向が薄れ、「健康・体力」を維持向上させるといふ実利志向が強まっていると解釈してよいだろうか。しかし、「この種目が上手くなりた

い」という項目への回答は 47.1% (2004 年度 : 42.9%) と比較的高い値を示している。

(3) 履修希望

反復履修者が多いことと同様に、方法 への来年度の履修を希望する者も多く存在する。「来年度は卒業している」と回答した 4 年生を除いた受講生の中で「ぜひ履修したい」と回答しているのは 44.1% にものぼる。これに「時間帯が合えば」34.8%、「やりたい種目があれば」7.4% を加えると、実に 86.3% の受講生が反復履修を希望していることになる。

(4) 方法 への要望・意見

方法 においては、これまで単位の増加に対する意見が多く表明されてきた。また、特に目立ったのは外でバレーを行うことに関する不満であった。しかしながら今年度は、それらの意見もいくつかは見られるものの、多くが、それぞれの授業の教員の教え方や授業展開に関する要望であった。これは、方法 には、より積極的に授業に関わろうとしている学生が多く集まり、それぞれの授業に具体的な改善点、工夫するべき点などを提言しているものと理解できる。これらは、それぞれの授業担当者に還元し、授業の向上に役立てたいと考えている。

(岡本 純也)

4. 教育部の活動・体制

本年度の教育部の活動・体制を以下に示す。

- ・日常的な教育活動の運営に必要な基本的業務の遂行
- ・2006 年度のカリキュラムの編成
- ・部会の開催 = 10 回
- ・実践交流会の開催 = 3 回
- ・課外活動との運動施設調整会議 (副学長主催) への参加
- ・学務課や施設課など、学内関係部局との国立キャンパスの運動施設・関連施設の整備・建設についての話し合い
- ・スポーツ方法 への受講生に対する受講状況調査
- ・全学 FD への参加
- ・「われわれの教育活動 - 総括と方針 - 」の刊行

本年度の体制は坂 (部長)、早川、藤田、岡本、関根 (庶務) であった。

(坂 なつこ)

・ 2006 年度教育活動の方針

1 . 2005 年度の達成と課題

2005 年度は、国立大学法人化 2 年目の年にあたって、次のように、課題を立てた。

「全学共通教育」改革の動向に適切に対応する。

早川教授の後任採用へ向けて最大限努力する。

全学の授業評価アンケートとスポーツ方法アンケートを利用し、学生の要求や意見、授業評価をふまえたカリキュラム編成、教育方法・内容の充実を心がける。特に教員へのアンケートではスポーツ方法の目的・目標に対応させて内容を検討する。

授業評価・成績評価について、大学教育研究開発センターと連携し、授業づくりをいっそう推進する。特に「学生の望む良い授業」像を探求し、前者とのすりあわせをする。

多人数講義については開講曜日・時限の変更など、その改善策を引き続き検討する。

体育施設の整備・拡充について大学執行部との交渉を含め、特に体育館建設については本学の長期的展望の形成へ努力する。

「スポーツ方法」の単位数に対する学生の不満の解消に向け、半期 2 単位化の方向性を模索する。

スポーツ科学・健康科学の開講内容の関連を検討する。

実践交流会、および、教育活動の総括と方針作り、冊子『われわれの教育活動』の充実に努める。

その成果としては、アンケート項目を検討し、より学生の満足度の内容を把握できるような調査項目とした。それに対しての「全学学習評価アンケート」は、2005 年度から「授業と学習に関するアンケート(全学授業アンケート)」と名称変更し、より学生の自己評価の方向に重点をおくものとなった。エリアとしては、特に独自の項目を設けることはしなかった。の多人数講義の解消については、『スポーツと映像文化』(鬼丸)においてオリエンテーションの出席を義務づけ、抽選とすることをアナウンスする試みをした。そのためか、最終的には抽選する必要のない人数で履修登録がなされた。に関わっては、実践交流会で、現在の運動文化科のカリキュラムがつくられた時の経緯や他大学のカリキュラムについて取り上げた。さらに、同様に、全学的なシラバス導入を受け、他大学のシラバスのあり方やシラバスとは何かという点についても検討した。また、実現はしなかったが、については、概算要求項目に「体育館の改修」が「復活」したことは、小さいながら前進ととらえられるだろう。

達成できなかったことは、の早川教授定年退任に伴う後任の採用である。大学の財政難による全学的な人事の凍結によるものとはいえ、大きな痛手であることは間違いない。次年度への大きな課題として残った。

2 . 2006 年度の基本方針

全学共通教育のカリキュラム改編がワーキンググループによって集約されつつあるなか、本

年度はその動向にも注意しながら、運動文化教育の蓄積と固有性をさらに発展させることが求められる。その点では、早川後任の採用は、2007年4月の採用に向けて、関係各部署との協議を重ねながら鋭意努力を重ねる必要がある。また、2008年3月には藤田教授が退任されるなど、退任が続くこととなる。それに向けての後任の採用についても尽力していく。

本年度は、本館改修工事に伴う6時制限が解消され、従来の体制へ戻る。教室使用上の調整は従来どおりとなるが、雨天時の使用や教室を使った実技授業の多様性を広げるためにも、調整につとめる。

また、昨年度指摘した、急速な大学改革のもとでの専任教員と非常勤講師との情報ギャップについては、Webシラバスの導入や、またGPA制度の本格的な導入が検討されており、情報不足にならないよう非常勤講師への大学全体としての適切な情報提供を呼びかけるとともに、運動文化科での独自の配慮もますます必要となっている。

これらの事態を踏まえ、また予想される新たな課題を想定して、本年度は以下のような基本的課題に取り組む。

1年延期された早川教授の後任採用へ向けて最大限努力する。

全学共通教育改革の動向を注視し、全学WGの中間報告に関して、全学的にどのような議論が行われたのかについては情報を収集し、適切に対処する。

全学授業アンケートとスポーツ方法に関するアンケート(スポーツ方法アンケート)を利用し、学生の要求や意見、評価をふまえたカリキュラム編成、教育方法・内容の充実を心がける。教員へのアンケートではスポーツ方法の目的・目標に対応させて内容を検討する。

授業評価・成績評価について、大学教育研究開発センターと連携し、授業づくりをいっそう推進する。とくに「学生が求める充実した授業」像と「教員の考える理想的な授業」像とのベクトルの重なりを探求する。

「スポーツ方法」の単位数に対する学生の不満の解消に向け、半期2単位化の方向性を模索する。

体育施設の整備・拡充について大学執行部との交渉を含め、特に体育館建設については本学の長期的展望の形成へ努力する。また、関係各署(教務課や施設課など)の責任者との懇談の場を設ける。

多人数講義については、開講曜日・時限の変更、受講生の抽選など、その改善策を引き続き検討する。

スポーツ科学・健康科学の開講内容の関連を引き続き検討する。

実践交流会および教育活動の総括と方針づくり、冊子『われわれの教育活動』の充実に努める。

運動文化科のホームページの充実に努め、学内だけでなく、外部へも広く情報発信できるように内容を吟味する。

非常勤講師コマの削減および新任教員の不充足による専任スタッフの負担増を考慮し、教育部の体制および活動について検討する。また、全体的な視野から、体制について種目および科目も含め新たな方向性を検討する。

3 . 教育活動

(1) 2006 年度のカリキュラム編成と体制

< 開講コマ : 全学共通教育・学部・大学院 >

全学共通教育科目における運動文化科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して 44.5 コマである。

	2006年度	2005年度
総開講コマ数	通年コマ	77.5 通年コマ
全学共通教育開講コマ	44.5 通年コマ	50.5 通年コマ
・方法 (療育コース)	30 (1)通年コマ	31 (1)通年コマ
・方法	19 半年コマ	25 半年コマ
・健康・スポーツ科学	7 半年コマ	8 半年コマ
・教養ゼミ	3 半年コマ	6 半年コマ
学部教育・大学院コマ	通年コマ	27 通年コマ
・学部講義	半年コマ	5 半年コマ
・学部ゼミ	通年コマ	15 通年コマ
・大学院講義	半年コマ	5 半年コマ
・大学院ゼミ	通年コマ	7 通年コマ

< 体制 >

- ・早川教授が 2006 年 3 月をもって定年退任され、専任 7 人の体制となった。
- ・非常勤講師は、10 名。担当コマ総数は 20.0 で、3.5 減である (2005 年度は 10 名、23.5 コマ)。運動文化科目開講コマ数(教養ゼミ含む)に占める非常勤担当コマの割合は、約 44.9 % である(2005 年度は 46.5%)。
- ・研究部と教育部の担当助手の交代により、研究部 : 関根と教育部 : 渡辺の体制となる。

< 種目別 2006 年度開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2006年度	(2005年度)	2006年度	(2005年度)
テニス	9	9	5	7
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	3	3
サッカー	3	4	2	2
バレーボール	1	2	1	1
軟式野球	0	0	1	1
ソフトボール	2	2	0	0

ジャズダンス	2	1	0	2
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
剣道	1	1	0	2
フラッグフットボール	1	1	-	-
陸上	-	-	0	0
器械体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	2
療育コース	1	1	-	-
合計	30	31	19	25

< 2006 年度の特徴 >

- ・早川後任の不補充分は非常勤コマで充当する。
- ・非常勤のコマ減により、スポーツ方法は 31 コマから 30 コマとなった。種目としては、サッカー、バレーボールをそれぞれ 1 コマ削減し、ジャズダンスを 1 コマ増にした。
- ・同様に、スポーツ方法は、25 (半年コマ) から 19 (半年コマ) となった。種目としては、テニス、ジャズダンス、剣道をそれぞれ、2 (半年コマ) 削減した。
- ・種目の特性と運動施設の規模を考慮し、2005 年度に引き続き、スポーツ方法 のソフトボールとスポーツ方法 の軟式野球の定員を調整した。
- ・スポーツ科学・健康科学については、8 (半年コマ) から 7 (半年コマ) に減じた。科目は、「ヒューマンセクソロジー」を 1 (半年コマ) に削減した。

(2) カリキュラム、および教育内容・方法の充実

これまでの教育水準を維持発展させるため、少ない体制においても充実したカリキュラムの提供が求められる。毎学期、学生に実施しているスポーツ方法アンケートでは、学生の満足・不満足度をより詳細に分析できるように設問を変更したので、それらの結果を授業に反映できるように努める。また、Web シラバスが本格的に導入されるが、そのような新しいツールを各々の授業の充実に生かせるように努力する。

具体的には、

- 「スポーツ方法」については、必修であることの意義を再確認し、
- ・授業ノートやグループ学習の活用を通して、学生が授業に能動的に参加できるよう工夫する。また、学生の技術向上への要望や運動欲求などを鑑み、年間スケジュールや練習形式、戦術等の教授方法などについても工夫する。TA が採用された場合積極的に活用する。
- ・グループ対抗の試合やゲーム、発表会、ミーティングなどが授業の全体的、通年的展開のなかで果たす役割、受講生の能動性やコミュニケーション、大学生生活に及ぼす影響について多面的に考察し、授業の改善に役立てる。
- ・グループ学習を採る場合、異質集団と同質集団では、教育効果や学習の深度にどのような

違いがあるのかを検討する。また、グループ間の交流も積極的に促す。

- ・屋外種目については、雨天時の円滑な授業運営に努める。
- ・遅刻者や欠席者に対する指導に留意し、長期欠席者、再履修者のケアに努める。
- ・成績の評価基準について継続的に検討し、スポーツ方法に共通する基準を模索する。

「スポーツ方法」については、

- ・非常勤担当コマの削減の要請を受け、開講コマの削減と種目の縮小をはかったことにより、学生の受講希望を満たせない事態の発生が想定されうる。従来から、新種目の開発とそれに向けて実践交流会等などで検討してきたが、今後の厳しい状況に対応すべく、さらなる検討を重ねる。
- ・例年のアンケートをいっそう活用し、希望の多い種目については復活するなど、学生の多様な要求に応えうるカリキュラムの編成に留意する。
- ・学生の満足・不満足の内容を検討し、さらなる授業の質の向上を目指す。
- ・各自の実践的課題を明確にするとともに、特徴ある授業実践や実験的授業実践を奨励する。演習化の方策を探る。
- ・雨天時の授業実践などに関して交流を深める。

「スポーツ科学・健康科学」については、

- ・学部科目との関係を検討し、それぞれの独自性と特徴を模索しつつ、より充実したカリキュラムを学生に提示できるように努める。また、学生が履修しやすいカリキュラムを提示するために体系化の可能性を模索する。個別にはシラバス等の充実を図る。
- ・多人数講義は、引き続き、開講曜日・開講時限の変更なども含め、その是正について検討し、その運営をサポートする体制を整える。

「教養ゼミ」については、

- ・受け身の「講義」形式ではない、「ゼミ」形式の授業参加のあり方についても指導し、積極的な参加と教員とゼミ生およびゼミ生同士の交流を促す。
- ・レポート集などを作成した場合は、1部を運動文化科に寄贈し、成果の蓄積がなされるようにする。また、優秀なレポートについては、雑誌『一橋』への教員推薦を勧める。

4. 教育条件の整備・拡充

現体育館の（床面積の増大、トレーニング室の設置等を含む）抜本的改修
プールの新設

現体育館の整備（ が実現されるまで）

- ・日常的なメンテナンス（授業開始前の清掃、電球の速やかな取替など）
- ・窓ガラスの補強・強度化
- ・男女更衣室の整備（壁の塗装、洗面所の増設・更衣棚取替、シャワーのカーテン取替）

新体育館予定地の用途変更

- ・多目的グラウンドの設置（整地とフェンス取付）

テニスコート（クレイ、オムニ）

- ・クレイコートのオムニ化

- ・オムニコート的人工芝の張り替え
- ・クレイコートとオムニコート間の緩衝地帯への芝生植え（水はけが悪く、ローラーかけもできない部分）

- ・オムニコートの日除けの設置

バレーボールコート

- ・グラウンド面のオムニ化と水はけ対策、特に体育館による日陰部分（雨季や冬季）

陸上競技場

- ・水はけ対策（但し、年度末の3種公認を得るための整備で解決すれば不要）
- ・フィールドの整地と芝生の整備

野球場

- ・日除けとベンチの設置
- ・器具庫の設置
- ・フェンス沿いの草刈り
- ・外野部分の凸凹の整地

西キャンパスの男女更衣室の管理

- ・授業に支障のないような維持管理（清掃の頻度が少ないため不十分）

トレーニング室の拡充・整備（現状ではあまりにも貧弱）

教材・教室利用設備の改善

- ・雨天時の教室の確保
- ・AV設備の整備・改善（AV操作に不慣れな場合の補助が必要なこと、マイク等のAV機器を教室に常備することなども要望事項としてある。）
- ・参考文献、参考ソフト、ビデオ教材などの充実

5．運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整

例年どおり、次年度カリキュラム編成期に、学生支援課主催で関係クラブ・サークルとの調整を行う。形骸化させることなく、意見交流の場としても充実させる方向で取り組む。

6．カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究

例年の調査活動に加えて、それぞれの授業担当者の「学習のためのアンケート」の結果を検討し、運動文化科全体のカリキュラムおよび教育法改善のための資料とする。

7．教育部の活動

（1）行事の開催

- 教育部会の定期的開催
- 実践交流会の開催
- 施設整備関係部署との交流
- 新年度顔合わせ会
- 教育活動の年度末総括

(2) 調査活動

- 「スポーツ方法」の満足度と「スポーツ方法」の受講希望調査(冬学期末)
- 「スポーツ方法」の満足度調査(夏・冬学期末)

(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

- 「われわれの教育活動」の刊行
- 施設整備・改善のための基礎資料の作成

(4) 2006 年度・教育部関係日程(案)

- | | | |
|----|-------|----------------|
| 4月 | 4日(火) | 新年度顔合わせ会 |
| 月 | 日() | 実践交流会1 |
| 月 | 日() | 実践交流会2 |
| 月 | 日() | 教育活動の総括・方針検討会議 |
| 月 | 日() | 年度末懇親会 |

われわれの教育活動

2005年度総括と2006年度方針

27

2006年4月4日発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室 042-580-8270

運動文化教員室 042-580-8131

〒186-8601 国立市中2-1
